

謡曲に據れるもの

巢林子の淨瑠璃文中に註記してある、クドキ、次第、シテ、ワキ、ツレ、ウタヒなどは何れも謡曲から出て、淨瑠璃に應用されたもので、これ等は語釋部に就いて見よ。

阿 漕

物の名も所によりてかはる 伊勢の濱萩・難波の蘆、よしといふも同じ草か、……げにやもの名も所によりてかはるよなう(佐佐木)

阿漕に「物の名も所によりてかはりけり、難波の蘆の浦風も、ここに伊勢の濱萩の音をかへて聞き給へ」と見えてある、これらに據つたのである。「はまをぎ」はその條を見よ。

蘆 刈

雨に着る田蓑の鳥 あめに着る田蓑の鳥の窠鶴(生玉) 雨に着る田蓑の鳥もあるなれば、露もますげの笠ばなどかなからん、難波津の春なれや、名に負ふ梅の花笠、縫ふてふ鳥の翼には、鶴もあり有明の、月のかさに袖さすば、天つ少女のきぬ笠、それは少女、これはまた難波女の、難波女の、かづく袖笠

ひび笠の、あめのあしべも亂るるかたを波、あなたへざらり、こなたへざらり、ざらりざらりざらざらざと、風のあげたる古簾、つれづれもなく心おもしろ(佐佐木)

雨に着る蓑を、田蓑の鳥にかけたのである。田蓑鳥は攝津國西成郡にある。なほこの文についでいへば、雨に著る田蓑の鳥の名もあれば、笠もあるであらう。露も増すに眞菅の笠をかけ、鶯の木傳ひあるくを縫ふといふより、笠も縫ふものなれば、梅の花笠縫ふてふ鳥の翼とつづけ、鶴よりして鶴もありというて、鶴に笠をきかせ、鶴もありから有明の同音語をつづけた。月のかさは月の暈である。かづく袖笠とは、俄雨の時に袖を畳すること。瓢笠とは瓢を頭にに懸すに、雨を浚ぐ時などにすること。雨の脚に蘆邊をかけ、蘆は風に亂れるより、亂るるかたを波とつづけた。かたを波」はその條を見よ。あなたへざらり云々は、蘆の浪風に打たれて亂れる様をいふ。つれづれもなく心面白とは、蘆刈の身は笠と波とを友として、物淋しいこともなく面白いの意。蘆刈に「雨に著る田蓑の鳥もあるなれば、露もますげの笠はなどかなからん、難波津の春なれや、名に負ふ梅の花笠、縫ふてふ

鳥の翼には、鶴も有明の、月のかさに袖さすは天つ少女の絹笠、それは少女、これはまた難波女の、難波女の、かづく袖笠ひぢ笠の、雨のあし邊も亂るるかたを波、あなたへざらりこなたへざらり、ざらりざらりざらざらざと、風のあげたる古簾、つれづれもなく心面白や。生玉心中のこの文は、嘉平次が愛人さかと別れて、一人しよんぼりと雨中に桐袖を拾うて着る状態をいうたのである。

われはまた賤の男が賤の男が、かづく袖笠瓢笠の、雨に木の葉も亂るる初時雨、あなたへ走り此方へ走りざらりざらりざらざらざと

「瓢笠」とは、瓢を頭に上げて笠とすること。「袖笠」はその條を見よ。蘆刈に「是はまた難波女の、かづく袖笠ひぢ笠の、雨のあしべも亂るるかたを波、あなたへざらり此方へざらりざらりざらざらざと」とあるに據つたのである。

安 宅

安宅の關守欺きし 文治の昔武藏坊辨慶が、安宅の關守欺きし例を引

くや梓弓(國性爺) 安宅は加賀國能美郡にあつて、當時の關址は今海中に陥つてゐるといふ。義經等主從十二人修驗者に粉疑はれ奥州に下る途中、安宅の關で關守富盛に疑はれ、關の通過を拒まれたので、辨慶乃ち勸進帳と稱して白紙を取出し、天にも響くと讀上げ、關守を欺いて無事に通過したことは、謡曲安宅にも見えてある。

まきみやう 歸命稽首敬つて白す(凱陣八鳥)

「歸命」梵語(南無)amaraの譯。佛の命令に歸順し、信願の極をあらはす語。このあたり文は安宅に據つたのである。

ごちのほうくわん 挿櫛といつげ五智の寶冠なり(虎が唐)

「五智の寶冠」黃色五角の寶冠をいふ。五智とは法界體性智・大圓鏡智・妙觀察智・平等性智・成所作智であつて、大日如來の成就し給へる心相である。これを寶冠の五角に當てたのである。この文は安宅に「頭中といつげ五智の寶冠なり」とあるを作りかへたのである。

これなる山水の落ちて巖にかかるところ、鳴るは瀧の水(藻師)

安宅に「これなる山水の落ちて巖に響くこそ、鳴るは瀧の水。謡曲拾遺抄に「當世酒宴に三國一ちやといふが如く、昔は酒宴母に鳴るは瀧の水をうたひし世」鳴るは瀧の水」をも見よ。

園生に植えても紅 宗清手を拍ち、流石なる御

舉動、全く君を討ち奉る心ならず
(鳥帽子折) 園生に植みて紅の、
色にもそれとしろしめせ(袍狩)

紅は「べにの花」を云ふ。人に勝れたものは必
ず世に顯はれるとの喩。安宅に「げにや紅は
園生に植えても隠れなし、強力にはよる目を
隠けじ」。

それうかうか大もん日して、大恩讓
りの古金の月は、…當來にては
いとし御見の床に入らん、歸命傾
城敬つて白す(虎が廳)

安宅の勸進帳の文を作りかへたのである。そ
れつらつらおもみれば」を見よ。

それつらつらおもみれば、大つらつ
らおもみれば、大盡客衆の秋の
月は小判の雲に光り、小傳呼びま
しや長返辭、驚かすべき夜半もな
し(淀鱈) それつらつらおもみれ
ば、韃靼逆徒の秋の月は、…歸
命稽首敬つて白す(國性爺)

ここの文は安宅の勸進帳を作りかへたのであ
る。安宅の勸進帳の文に、「それつらつら
ん見れば、大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隠
れ、生死長夜の長き影翳かすべき人もなし、
爰に中頭帝おはします、御名をば聖武皇帝と
名付け奉り、最愛の夫人に別れ戀慕やみ難
く、涕泣眼に荒く涙玉を賣く、思を善途に翻
して願舍那佛を建立す、かほどの靈揚の絶え
なんことを悲しみて、俊乘坊源語諸國を勸進
す、一紙半巻の奉財の輩は此世にては無比の
樂にはこり、當來にては歌千蓮華の上に坐せ

る

大恩教主 大恩教主の秋の月は涅槃
の雲に隠れ(凱陣八鳥)

釋尊を云ふ。一切衆生が煩惱を斷絶して生死
の境を出離されるのは釋尊教化の賜である。
故に釋尊を大恩教主と云ふ。こゝのあたりの文
は安宅の勸進帳に據つたものである。「それつら
つらおもみれば」の條を見よ。

旅の衣は襦袢の、露けき袖やしほる
らん(藤野)

襦袢(その條を見よ)の袖には露(袖括りの緒
の垂れた端の褌)と云ふもの附いてゐるから
その露に雨露の露をいひかけて、「露けき袖や
しほるらん」とつづけたのである。安宅に、
「旅の衣は襦袢の、露けき袖やしほるらん」
藤野(藤野の)の條を見よ。

とも絶えずととうと面白や(源義經)

「ととうとは察察と、水音の鼓の音のやりに
鳴るを形容した語である。安宅に「絶えずは湖
の水、日は照るとも絶えずとたりたり、絶えず
とたりとくとくとく立てや」とありて往時酒宴
の席で詠うた歌である。「鳴るは湖の水」をも
見よ。

毒蛇の口、虎の尾を踏む (井筒)

心に危懼を抱くこと。危懼を冒すに喩ふ。
安宅に「虎の尾を踏み、毒蛇の口を割れた
心地して」。「虎の尾を踏む蛇の口を見よ」。

進す(國性爺)

「りんきやうのはうじが末葉諸國を勸
進す(國性爺)

「りんきやうは臨邛で、蜀の臨邛郡をいふ。
「はうじ」は方士で、仙術を得た道士をいひ、
白居易の長恨歌に「臨邛道士鴻都客」とあつ
て、鴻都の仙客楊通幽のことである。楊貴妃
死んで玄宗皇帝悲しみのあまり、臨邛の方士
楊通幽をして黃腸の魂の所在を尋ねさせた、
方士乃ち太眞殿と額を打つてある處に行つて
貴妃に逢うたといふ。巢林子のこの所の文の
「それつらつらおもみれば、韃靼逆徒の秋
の月は、…天も響けと讀み上げた
り」までは、安宅の勸進帳の文をもちつたの
のであつて、こゝに「はうじ」を、勸進帳の文
に「俊乘坊源語諸國を勸進す」とあるを改作
したのである。

るしやなぶつ 思ひを善路に續し
て盧舍那佛を建立す(凱陣八鳥)

「盧舍那佛」(盧舍那梵語毘盧舍那(Vairocana)の略、光明照の義。華嚴宗・天台宗では釋迦牟尼佛の内證たる靈體佛の尊稱となし、眞言宗では大日如來の梵名としてゐる。凱陣八鳥のこゝの文は安宅に見えたる。

遼遠東南の雲を起し、西北の雲霜に
責められ埋るる御身の果(藤野)

雲東南に起つて西北に行けば天氣不順とな
る。東南は吉野藩、西北は北國藩をいうたも
ので、義經の身置所なく諸國を流浪すること
をいうたのである。安宅に「藤原は彌増に世
にありて、遼遠東南の雲を起し、西北の雲霜
に責められ埋るる御身をことり給ふべきな
るに實」。

*わうらい 元來勸進帳あらばこそ、
往來の巻物取出し勸進帳と名づ

け(凱陣八鳥)

「往來手紙の送答文を畫集のたものをいふ、
庭訓往來などは人のよく知る所である。安宅
に「笈の中より往來の巻物一卷とりだし勸
進帳と名づけつ」。

【安達原】

東方に隆三世、南方に軍荼利夜叉、
西方に大威徳、北方に金剛夜叉
明王、中央に大日大聖不動明
王(凱陣八鳥)

五大明王を勸請して祈禱する詞である。隆三
世、軍荼利夜叉、大威徳、金剛夜叉、大日大
聖不動の五明王を五大尊と稱す、五大尊の修
法には五壇を設け、西壇に隆三世明王、南壇
に軍荼利夜叉明王、東壇に大威徳明王、北壇
に金剛夜叉明王、中央壇に大日大聖不動明王
を勸請して祈るのである。安達原に「東方に
隆三世明王、南方に軍荼利夜叉明王、西方に
大威徳明王、北方に金剛夜叉明王、中央に大
日大聖不動明王、唯呼唯呼唯呼唯呼唯呼唯呼
云」(巢林子作「一心五戒魂」に「東方に隆魔の
朝、西方に大言上げおめいにかかれは、南方
は眞下りに通げて行く、北方金剛力を出し、
中央大日不動の利御振立て」とあるは五大尊
を祈る詞を作かへたのである。

*かぜつ 知らず我羅刹國に來れる
り(嶺山姥)

【羅刹梵語(Rakshas)である。食人鬼また
は速疾鬼と譯す、毘沙門に奉仕する惡魔であ

る

る。羅刹の任する國を羅刹國といふ。嶮山班のこのあたりの文は安達原にもつづいたものである。

【敦 盛】

淡路漏通ふ千鳥の聲聞けば、寐覺も須磨の關守は誰そ、いかに蓮生、敦盛こそ待受けて候へ(大原問答)

敦盛に「淡路漏かよふ千鳥の聲きけば、寐覺も須磨の關守は誰そ、いかに蓮生、敦盛こそ望りて候へ。」

一念彌陀佛即滅無量罪 (實古教傳)

一念彌陀佛即滅無量の罪障を晴さん稱名の、法事を絶えせず引ふ功力に(大原問答)

心意を散亂せずして一念に阿彌陀佛を念誦する時は、如何に許多の罪障も忽ち消滅す。寶王論に「一念彌陀佛、即滅無量罪矣」。觀經に「稱念佛名故、於一念心中、除八十億劫生死之罪矣矣」。敦盛に「一念彌陀佛、即滅無量の罪障を晴さん稱名の、法事を絶えせず引ふ功力に」。

*しよらみやう 一念彌陀佛、即滅無量の罪障を晴さん稱名の、法事を絶えせず引ふ功力に(大原問答)

〔海名無阿彌陀佛の名號を稱すること。敦盛に「うたてやな一念彌陀佛、即滅無量の罪障を晴さん稱名の、法事を絶えせず引ふ功力に、何の因果はあり磯海の」。詮方なみに駒を控へ呆れ果ててぞお

はしける、かかりける所に後より熊谷の次郎直實逼さじと追駈けたり、敦盛も馬引返して、波の打物抜いて二打三打は打つぞと見えしが、馬の上にて引組んで波打際に落ち重なり(大原問答)

敦盛に「詮方なみに駒を控へ呆れ果てたる有様なり、かかりける所に後より熊谷の次郎直實逼さじと追駈けたり、敦盛も馬引返して、波の打物抜いて二打三打は打つぞと見えしが、馬の上にて引組んで波打際に落ち重なりて終に討たれて失せし身の。」

【葵 上】

昨日の花は今日の夢、身に簀かぬ恨めしやな、世の憂さに人の辛さのなほ添ひて、浮かみもやらぬ妄執(弘徽殿)

葵上に「昨日の花は今日の夢と、驚かぬこそ愚なれ、身の憂きに人の恨みのなほ添ひて、忘れもやらぬ我が思ひ。」

くしきのまど 西坂本の別業に、九識の窓の前、十乗の床のほとり、瑜伽の法水をたたへて、三密の月ばさせども(天神記)

〔九識の密〕華嚴宗天台宗などでは九識を立つ、即ち眼耳鼻舌身意の六識と、末那(譯して思量)阿賴耶(譯して藏と云ひ、六識の根本である)雜摩羅(直まら清淨と譯し、眞

如の理體に名づく)の三識とを加へていふ。「九識の密」とは、靜坐して九識を修行觀法する深慧をいふ。葵上に「九識の窓の前、十乗の床のほとりに、瑜伽の法水をたたへ、三密の月を澄す所に」。

さんみつ 九識の窓の前、十乗の床のほとり、瑜伽の法水をたたへて三密の月ば指せども、軒の戸を敲くべき人も、覺えぬに(天神記)

汝が家の眞言秘密、三密ゆがの阿字金胎も別經三部の外を出でず(采領曾梵)

〔三密〕如來の身密、口密、意密の三種作用を云ふ。密は秘密の密の義である。如來は神通を現じまたは法を説き或は思惟されても、佛の間に見知されるのみであつて、因人の思議することができないによつて三密と云ふ。

〔三密の月〕は、眞言三密の行法の妙なるを月に喩へて云つたのである。葵上に「九識の窓の前、十乗の床のほとりに瑜伽の法水をたたへ、三密の月を澄す所に」。

〔三密瑜伽〕の瑜伽は梵語(yoga)である、相應と譯す。行者の三密が如來の三密と相應じて、即身成佛の義を成するを云ふので、眞言密教のいふ所である。

*しやばてんくわうのさかひ 娑婆でんくわうの境には戀も無常もなかりけり(三世相) 夫れ娑婆電光の境には恨むべき人もなく悲しむべき身にもあらざるに(安夫池)

遊かねばならぬ境異なるが故に云ふ。葵上に「夫れ娑婆電光の境には恨むべき人もなく悲しむべき身にもあらざるに、いつ捫うかれそめつらん」。

天清淨地清淨、内外清淨、六根清淨 (卯月紅巻)

葵上にも「天清淨地清淨、内外清淨、六根清淨、より人は今ぞ密りくる云々」とありて神子の唱へる文である。

ゆがのほふする 九識の窓の前、十乗の床のほとり、瑜伽の法水をたたへて、三密の月ばさせども軒の戸を叩くべき人も覺えぬに(天神記)

〔瑜伽法〕亦瑜伽は梵語(yoga)である、譯して相應といふ。普通に眞言三密の觀行を瑜伽といふ。この觀行の法力は微妙にして、即身成佛の利益衆生一切の願望を満足せしめるが故に、水の萬物を測すに喩へて瑜伽の法水といふ。この文は葵上に「九識の窓の前、十乗の床のほとりに瑜伽の法水をたたへ、三密の月を澄す所に」とあるに據つたのである。

【海 士】

鎌足の大匠玉を取る思案ばつかり(大經師)

唐土から贈れる珠玉を讃州志度の浦にて詔旨へ奉り去られた、鎌足これを取戻さうとしてその浦に下り、卑しき海女と契り、その海女を詔旨に送つた。海女乃ち利勢を以て詔旨に飛入り、珠玉を取戻したことを、海士や菓林子作の大經冠に詳し。

その外おさん鱈の口 (大經師)

海士に「その外鰓魚鱈の口」の作り響。

南無や志度寺の觀音薩埵の力を合せてたび給へと、大悲の利劔婆娑の縁(大經師)

海士に「南無や志度寺の觀音薩埵の力を合せてたび給へと、大悲の利劔を頼に於て」と見えてゐる。なほこのあたりの文は海士に據つたものである。「女房故に捨てん命云々」を見よ。また「志度寺」「大悲の利劔」はその様を見よ。

女房故に捨てん命露ほども惜しからずと、……、約束の錢箱動かせば、てらをよみ立て繋かれたりけり、餘の玉は知らず(大經師)

海士に「我が子故に捨てん命露ほども惜しからずと、……、約束の錢箱を動かせば、人々よろこび引きあげたりけり、玉は知らず」とあるを改作したもので、謡曲では玉の段と稱する所である。

一つの利劔を抜き持つて彼の海底に飛入るぞ (大經師)

海士に「一つの利劔を抜き持つて彼の海底に飛入れば」とあるに據つたもので、利劔に男根をきかせ、海底に女の閨房をきかせたのである。男根を利劔にいひなした例は西澤興志撰の新版五卷書(元禄十一年刊)にも見えてゐる。

【藍染川】

神は二階へあがらせ給へ (姥合)

湯屋の亭主が遊女更科らに二階に上られよといふに、藍染川に「唯これ當社の神恩ぞ、よろこびの祝詞を奉れば、神はあがらせ給ひけり」とあるを應用して洒落たのである。

【一角仙人】

瓶には谷連一滴の水を納め、鼎には青山數片の雲を煎す、曲終へて人見えず、青かりし袖も今は紅の、秋の氣色は面白や(浦島)

瓶には谷の水の點滴を汲入れ、酒に代へてこれを飲み、鼎には青山に懸れる白雲を入れ、これを照じて湯に用ふ。琴など歌曲を彈じ終へても、山中寂寞として語る友もない。何時か青山は紅葉と變つて、秋の風景あはれに面白いわいとの意で、仙家の様を歌したのである。一角仙人に「瓶には谷連一滴の水を納め、鼎には青山數片の雲を煎す、曲終へて人見えず、江上歌聲青かりし袖も今は紅の、秋の氣色は面白や」山本九兵衛版、七行本に「雲を直す曲を得て」とあるは「雲を直す曲終へて」の誤。

【鶉詞】

玉島川にあらねども 玉島川にあらねども、小鮎すなだる 如くなら(源義經) 玉島川にあらねども、小鮎さばしるせざらぎにかだみて 魚はよもためじ(大磯虎)

肥前の國の玉島川は古來鮎の名所である。昔神功皇后この川で鮎を釣り給ひ、また其國人も鮎を釣ると云ふ。貝原好古撰「八幡宮本紀」に、「この玉島川の年魚は他所の年魚にかはり、脂多く吻實にして味香美也」と見えてゐる。鶉詞に「玉島川にあらねども、小鮎さばしるせざらぎに、かだみて魚はよもためじ」。

傳へ聞く、遊子伯陽は月に誓つて契をこめ、二つ夫婦の星となり(川中者)

昔夫婦の者あつて夫を遊子といひ、妻を伯陽といふたが、死して夫婦の二星とまつたこと鶉驚記に見えてゐる。鶉詞に「傳へ聞く、遊子伯陽は月に誓つて契をなし、夫婦二つの星となる」。

【善知鳥】

銅の爪をとき立て 鐵の齒を鳴らし 其時青き兎角を怒らし、銅の爪をとき立て、鐵の齒を鳴らし(大原問答)

善知鳥に「鐵の齒を鳴し羽をたたき、銅の爪を磨立てては」。うたふ聲にも血の涙、子はやすかたの囀りや(夕霧)

て子はやすかたと答へけり、扱ぞ取られやすかた、うとふ、親は空にて血の涙を降らせば云々。新撰歌枕に「そのの濱といふ所にうたふやすかたと云ふ鳥の侍者が、此濱の砂子の中にかくして子を生みおけるを、狸師母のうたふがまねをしてうとふとふと呼べば、やすかたとぞ這出づるを取るぞと申す、其時母鳥來りて彼方此方へ付きありき鳴くなり、其涙の血の濃き紅なるが雨の如く降るなり云々」。善知鳥は鳥取とも書く、雌に似た水鳥で、淡黒色で腹白く、嘴長く、津輕海邊に破んでゐる海鳥である。

うとふやすかた 道さへ知らず連鳴く鳥を見よ(源義經) 年ばへも磯部のうとふやすかたの子を後見て身を捨てず(最明寺殿)

「善知鳥安方」善知鳥といふ鳥は、その親鳥がうとふと鳴けばその子鳥はやすかたと鳴くと云ふ。「うたふ聲にも血の涙云々」を見よ。善知鳥に「あら心うとふやすかた、安き懐なき身の苦しみを」。

鹿を追ふ獵師は山を見ず(水朔日)

情に驅られて道理を忘れる。善知鳥に「鹿を追ふ獵師は山を見ず」。士農工商の家にも生れず、又は琴書畫を事とする身にもあらず(三世相)

善知鳥に「士農工商の家にも生れず、又は琴書畫をたしなむ身ともならず」。選れかた野の狩場の吹雪に空恐し

や (用明天皇)

遁れ難いに交野をいひかけたのである。交野は河内國交野郡(今は北河内郡に入る)で、續日本紀に「桓武天皇延暦二年幸交野、放鷹遊獵」とありて、往時の狩獵地である。猛火の羽風追立て引立て行かうとするによつて空恐しやといふたのである。善知鳥に「遁れかた野の狩獵の吹雪に空恐しや地を走る」。

【采女】

猿澤の池の面に水滔滔として汲また
悠悠たりとかや(天智天皇)

猿澤の池は地名部を見よ。采女に「猿澤の池の面に水滔滔として汲また悠悠たりとかや」。

花開け香凝りて佛法流布の神の山、
菩提樹の木蔭とは、藤の鳥居に藤
咲きて松にも花をかすが山、長閑
けき影は靈山の淨土の春に劣らめ
や(天智天皇)

采女に「花開け香凝りて佛法流布の種久し、昔は靈山にして妙法華經を説き給ふ、今は衆生を度せんとして大明神と顯はれ此山に住み給へば、鶯の高嶺とも三笠の山を御覽せよ、扱普提樹の木蔭とも、盛なる藤咲きて松にも花をかすが山、長閑けき影は靈山の淨土の春に劣らめや」とあるに據つたのである。

【梅枝】

捨てもめぐる世の中は、心の隔て
なりけり(女夫池)

世捨て人となつたれど、なほ廻國修行するは、全く出離し離れて自他の隔てあるからであるわいの意。梅枝に「捨てもめぐる世の中は、心の隔てなりけり」。

【浦島】

あけて悔しき玉手箱 (松風)

浦島に「身に白露の玉手箱、明けて悔しき心かな」。

【江口】

歌へや歌へ泡沫の (歌念佛)

江口に「歌へや歌へうたかたの、あはれ昔の戀しさを」。巢林子かく謡曲の文を引用して、直ちに「小舟作りてお夏を乗せて云々」と、小唄の調子に倣ひ、いつもながら變化の妙を極めてある。

面白や實相無漏の硯の海に、五塵六
欲の浪はたたねども、隨緣眞如の
筆を染めぬ日はなし(實古教信)

「實相無漏」「五塵六欲」「隨緣眞如」はその條を見よ。江口に「面白や實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、隨緣眞如の波の立たぬ日なし」。

河舟をとめて逢ふ瀬の波枕(實古教信)

江口に出である文である。逢ふことを逢瀬とらへば、それを河の瀬にひひかけたのである。波枕は舟中に探ること。

紅花の春の朝、紅錦繡の山、粧ひな
すと見えしも夕の風に誘はれ、紅

葉の秋の夕、黃纈繡の林、色を含むといへども朝の露に衰ふ、松風羅月に言葉をかはず賓客も去つて來ることなし、翠帳紅闇に枕を並べし妹背も、いつの間にかは隔つらん(實古教信)

この文は江口に出である。但し「朝の露に衰ふ」は「朝の露にうつるふ」となつてゐる。春の頃紅花咲き亂れ、山紅錦繡の如く見えるが、それもやがて風に散つて美しかつた風景跡もなく、秋の頃繡林黃葉し恰も黄色のしぼり染したやうに見えれども、やがて露の爲に衰へて落つる、人間の盛衰も亦斯の如きである。松吹く風萬葉を照す月の景色に誘はれて、訪ひ來る客もただ一時であつて終には來ない、翠の帳紅の闇に枕を並べし妹背を契るといへども、それとも一時のことであつて、何時の間にか互に隔り終るとの意。

*ごちんちやくよく 實相無漏の大海
に、五塵六欲の風は吹かねども
も(松風) 實相無漏の硯の海に、五
塵六欲の浪は立たねども(實古教信)

「五塵六欲」色・聲・香・味・觸の五つのは人の心を汚染すること、恰も塵の如くなるが故に五塵といふ。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根より起る欲情を六欲といふ。五塵六欲の熾盛なる風に喩へて、五塵六欲の風と云ふ。江口に「實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども」。

*さんづ 三途八難の惡趣に墮
す(反魂香)

「三途」地獄・畜生・餓鬼の三惡道を云ふ、これをまた三惡趣ともいふ。江口に「三途八難の惡趣に墮して」。

*するえんしんによ 面白や實相無
漏の硯の海に、五塵六欲の浪は立
たねども、隨緣眞如の筆を染めぬ
日はなし(實古教信) 前に法性無漏
の海、隨緣眞如の波は打つとも騒
がば騒げ(聖徳太子) 隨緣眞如の初
潮(百日曾我)

「隨緣眞如」眞如は萬有の本體で眞實常のものなれども、諸縁に隨應して一切の相を變現するによつて隨緣眞如と云ふ。眞如が諸縁に隨應して差別の相を變現するを、彼方此方に形を變へ毎日文を書くことに喩へて隨緣眞如の筆と云ひ、初潮が千波萬波をあげるに喩へて隨緣眞如の初潮と云ひ、海の波立つに喩へて隨緣眞如の波というたのである。江口に、「面白や實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、隨緣眞如の波の立たぬ日なし」。

らげつ 松風羅月に詞を交す賓客も
去つて來ることなし(實古教信)

「羅月」つたづらに照る月。この文は江口に「羅月」を見よ。李白の贈嵩山焦鍊師詩「朝(夕々々)を見よ。李白の贈嵩山焦鍊師詩に「羅月挂朝鏡、松風鳴夜砧」。

*ちくちん 生死の隙に夜來て、
六塵の境に迷ひ六根の罪を作ること
も(實古教信) 六塵の樂欲多しとい
へどもまたこの惑ぞやめ難
き(兼好)

「生死の隙に夜來て、六塵の境に迷ひ六根の罪を作ること」とも(實古教信) 六塵の樂欲多しといへどもまたこの惑ぞやめ難き(兼好)

「六塵」色、聲、香、味、觸、法の六つは人の心を離すものなればこれを六塵といふ。賀正古歌七巻のこの文は、江口に「實にや皆人は六塵の境に迷ひ六根の罪を作ることもある事聞く事に迷ふ心なるべし」とあるに據つたのである。兼好法師物見車のこの文については、「あいちやくの道云々」を見よ。

【大江山】

赤きは酒の科ぞかし、鬼とな思し召されそよ、我もそなたの御姿打見には恐ろしげなれど、馴れてつばいは山伏なう、夜も更けぬお休みあれ、我もまどろまんいさらば、明日對面と、荒海の陣子押し明け

秋風あきかぜの音ねにたくへて西川さいがわや、雲うみも行くなり大江山おほえ、……(酒吞童子枕言葉)

秋風は西より吹くものなれば、西川にかけていふ。たぐへてはまじりていふ程の意。西川は京都の西なる大堰川の筋をいふ。雲も行くなりとは、我出立する方向に雲も行くのぢやの意。丹波國大江山へは西川を渡つて行くのである。この文は大江山によつたものである。併せて見よ。

*鬼神きしんに構かま道なきものを。徒然草に「鬼神によしまし」。

つばい 打見れば恐ろしげなれど、なれてつばいは山伏なう、夜も更けぬおやすみあれ(酒吞童子枕言葉)

大江山に「打見には恐ろしげなれど、馴れてつばいは山伏、なほなほめぐる孟の。」

【女郎花】

邪よこしま鬼おには身を賣めて、劍けんの山の上うへに戀こひしき人は見えたり、嬋めづしやとて攀かぢ登のぼれば、劍けんは身をとほし磐石いんせきは骨ほねを摧くだく、こはそも如何いかに怖おそしや(三世相(堀川波鼓))

【杜若】

木津きつや難波なんばの海面うみづらに立つ波なみを見て、……打眺うちながめ行けば、河内かふちなる生駒なまがまの嶽たけなれや、……末すえはるばるの旅衣たびぎ(三國志)

杜若つげに「伊勢や尾張の海面に立つ波を見て、……打眺め行けば、備前なる淺間の嶽なれや、……なほはるばるの旅衣や、……」

初冠はつかんの透額とうがく春日はるひの里さとにぬき置きて(天智天皇)

似にたりや似にたり 似にたりや似にたり 杜若つげ花はなあやめとて、澤邊さわべにさきし盛さかりにもいづれあやめと引ひまがふ(井筒) 澤邊さわべの菖蒲あやめ、杜若つげ、似にたりや似にたり二子山ふたこやま(加増會狂)

燕つばき子こ花はな、紫むらさ帽子ぼうし今いま官くわん 杜若つげに「似たりや似たり杜若花菖蒲」とある。杜若と花菖蒲は能く似てゐるよりいらたのである。巢林すうりん子この文をとつて種種しんしんに應用えんようしたのである。(厚云)「かきつばはたは燕子花と書くべく、杜若は「やぶめうが」の誤用字であるといへど、杜若を「かきつば」と讀んで

仁明天皇にんめんてんの御宇ごうかとよ(松風)

一度いちどは榮さかえ一度いちどは衰しやぶふる理ことわりの、誠まことなりける世よの習なまじり、住すまみ所ところ求もとむとて東あづまの方に(定盤)

杜若つげに「一度は榮え一度は衰ふる理の、誠なりける身のゆくへ、住み所求むと東の方に行く雲の」とあるに據つたのである。

【景清】

景清かげせいこれを見て、物物ものものしやと夕日ゆふひ影かげに打物うちものひらめかいて、切きつて懸かればこらへずして、又また向むかひたる兵へいは四方しやうほうへばつとぞ逃にげにける(繪巻三)

景清かげせいこれを見て、物物しやと夕日影に打物ひらめかいて、切つて懸ればこらへずして、又向ひたる兵は四方へばつとぞ逃げにける(繪巻三)

景清かげせいに出いでゐる文である。景清と三保みほの谷やの鐵てつかの景清と三保の谷の鐵の鐵てつか荒磯あらいそに、繋つなぎし舟ふねの鐵てつを、切きつてばなすもかやらん(順八景) 壽永三年三月下旬源平屋島の合戦に、平家の將姫七兵衛景清が源氏の家來三保の谷の鐵を

強んで引寄さうとし、三保の谷は逃げようとして、雙方強力であつたので兜の鍔がちぎれたといふ。景清に「なにがしは平家の侍懸七兵衛景清と名乗かけ、手取にせんと追うて行く、三保の谷が着たりける胃のしころを取はし、取はし、二、三度逃げのびたれども思ふ敵なれば適さじと、飛かきり胃をおつとりえいと引く程に鍔はきれて此方にとまれば、主はさきへ逃げのびぬ。」

さもしやかたがたよ、源平互に見る目も恥かし、一人をとめん事は案のうち物、小脇にかいこんで何某は平家の侍懸七兵衛景清と名乗かけ、手取にせんと追うて行く、三保の谷が着たりける兜の鍔を取外し取外し、二、三度は逃げ延びたれども思ふ敵なれば飛かきり、兜をおつとりえいと引く程に、鍔は切れて此方に留れば、主は先へ逃げよ逃げよはや落ちられよと(西王母)

景清に「さもしや、方々、源平互に見る目も恥かし、一人を留めん事は案のうち物、小脇にかいこんで、何某の平家の侍懸七兵衛景清と名乗かけ、手取にせんと追うて行く、三保の谷が着たりける兜の鍔を取はし、取はし、二、三度逃げ延びたれども思ふ敵なれば適さじと飛かきり、兜をおつとりえいと引く程に、鍔は切れて此方に留れば、主は先へ逃げのびぬ。」

外し取外し、二、三度逃げ延びたれども思ふおてきなれば適さじと、飛懸りひつたり惡洒落、ごんせを止めたる女景清、鍔と頭巾(天網島)「三保の谷」は源氏の臣三保の谷四郎である。三保の谷が逃げ延びようとするを遊客に當て、又懸七兵衛景清を仲居のきよに當て、遊客を齧れて取押へるをいうたのである。この文は景清に「三保の谷が着たりける胃のしころを取外し、二、三度逃げ延びたれども思ふ敵なれば適さじと、飛懸り兜をおつとりえいと引く程に、鍔は切れて此方にとまれば云云」とあるに據つたのである。

【柏崎】

こしんのみだ 心といひ意識といひ善となり悪となる、己心の彌陀と説かれたり(津月三郎) 己心の彌陀・唯心の淨土(百目曾我)

「己心の彌陀」萬法唯一心なれば、心の外に佛もなく淨土もない、彌陀も己が心中の彌陀であつて、淨土も我心中の淨土である、故にこれを唯心の淨土ともいふ。佛説觀無量壽經に「彌陀佛去此不遠」とありて、合讚の註に、「言願樂不遠、彌陀在己心」。柏崎に「心外無別法、心佛及衆生と聞く時は、是三無差別な疑のあるべきや。己身の彌陀如来、唯心の淨土なるべし、云云。」

り、電光石火の影の中には生死の去來を見る(兼好) 慕戀人別界の無常の有様を觀じ悟つて見るに、春に花の咲いて散り秋に葉の落ちるを見ても轉變の世を思ひ知り、稻妻や石打つ火の怒怒として消えるを見ては、死しては生れ・生れては死ぬる身のはかなさを知るの意。この文は柏崎に出てある。

【葛城】

よそにのみ見し白雲の高間山、高嶺天に横たはり(浦島) 葛城(喜多流)に、「餘所にのみ見し白雲や高間山の。」高嶺天に横たはり云云はそれの條を見よ。

我には辛き葛城の、神隠れして遣りすこし(天網島)

人目を忍ぶ治兵衛には、人に見付けられては辛く、葛の方に隠れて番太郎を通り過ぎさせとらふ意に、葛城の神が人に見られるのを辛がられた故事を引用してかくいうたのである。葛城に「明くるわびし葛城の、……、神かくれにせむりにけり。拾遺集卷十八、左近の歌に「岩橋のよるの契も絶えぬべし、明くるはし葛城の神。」

【鐵輪】

恐しや蜘蛛に三十番神ましまして、魍魎鬼神は穢らはし、出てよ出てよと責め給ふぞや、……(弘徽殿)

恐しや三十番神ましまして、魍魎鬼神は穢らはしや、出てよ出てよと責め給ふぞや、腹立ちや思ふ人をば取らて、刺へ神神の責を受くるか(女遊島) 「三十番神」魍魎はそれの條を見よ。鐵輪に、「恐しや蜘蛛に三十番神ましまして、魍魎鬼神は穢らはしや、出てよ出てよと責め給ふぞや、腹立ちや思ふ人をば取らて、刺へ神神の責を受くる惡鬼の神通云云。」

蜘蛛の絲に荒れたる駒はつなくとも、二道かくるあだ人を思ふはつらし(蜘蛛丸) 蜘蛛網で荒馬を繋ぐことは不可能な事だが、よしやそれは出来るとして、それよりも二人の女に心を懸けるあだだしい男を思ふは尚つらいと意。鐵輪に「げにや蜘蛛のいに荒れたる駒は駑々とも、二道かくるあだ人を類まじとこそ思ひしに。」謡曲拾遺抄、鐵輪に「蜘蛛のいに荒れたる駒はつなぐとも二道かくる人は類まじ。これは古くよりいひ傳へたる古歌なれども、よみ人定かならず、何れの集にも見及ばず、漢羅草にこの歌の上句ありて下句なし。」

てんどうぶ 宗廟社稷の天神・地神・明玉部・天童部・九曜・七星・二十八宿・五行の靈・三十六禽驚し奉り(弘徽殿)

「天童部」天人または護法の鬼神等が童子の形相をなして人界に出現するものを天童といひ、その部屬を天童部といふ、十六童子など

即ちこれである。鐵輪に、「大小の神祇諸佛菩薩明王部天童部九曜七星二十八宿を驚し奉りて、

二十八宿 九曜、七星、二十八宿、五行の靈、三十六禽を驚し奉り(弘徽殿)

東西南北に各七宿星あつて合せて二十八宿ある。二十八宿の名稱及びその圖は佛傳圖卷三に見えてある。春秋傳に、「二十八宿分在四方、方有七宿共成一象」。辨論に、「九曜、七星、二十八宿を驚し奉り」。

みやうわろ、こゝに僧正遍昭は明

王の御告あり(松風) 宗廟社稷の天神、地神、明王部、天童部、九曜、七星、二十八宿、五行の靈、三十六禽驚し奉り(弘徽殿)

〔明王〕大日如來の眷族で惡魔降伏佛法守護神で、愛染明王などもその一で眞言宗に説ける諸尊である。「明王部」は五大明王をいふ、その條を見よ。弘徽殿鶴羽進家のこの文は鐵輪に、「大小の神祇、諸佛菩薩、明王部、天童部、九曜、七星、二十八宿を驚し奉り」とあるを應用したのである。

【兼平】

兼平とは木曾殿の御内に今井館、酒盛にかくれなき一騎當千の御者、磯打つ波のまくりのみ、蜘蛛手かくなわ十文ぎり(女楠)

乗りかけて、大勢に割つて入れれば、もとより一騎當千の秘術を顯はし、大勢を粟津の汀に追つつめて、磯打つ波のまくり切り、蜘蛛手十文字に打破り、「今井館」まくりのみなどはその條を見よ。

おとし、引けどもあがらず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えはこそ、こは何とならん身の果(泥塵)

兼平に「すましら雪の薄氷、深田に馬をかけた、引けどもあがらず打てども行かぬ望月の。駒の頭も見えはこそ、こは何とならん身の果」とありて、木曾義仲が破れて粟津が原の深田に馬を駈落した一節である。

はるめきながりかりこして、末白雲の買がかり、首だけ積る借鏡の、深田に馬を駈落致し(薩摩歌)

〔はる〕は春に張る、博奕にて物を賭けること。その條を見よ。をいひかけたのである。「かりこし」は雁越しに借越しをいひかけたのである。兼平に「春めきながりかえかへり、比較の山風の雲行く空も異織、あやしや道路の末白雲の薄氷、深田に馬を駈落し」。

深田に馬を駈落し、引けども上らず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えはこそ(登門松)

兼平にある文である、それを應用して相手に桂馬を取られることにならしたのである。序云「深田に馬を駈落しは、木曾義仲が粟津原の深田に馬を駈落したのをいふ。『望月の駒』は、昔時信濃國望月の里から朝廷に馬を

奉ることがあつたにより、その縁によつたのである。

深田に馬を駈け落し、引けども上らず、打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えはこそ、こは何とならん浅ましと(融大匠)

兼平に「深田に馬を駈け落し、引けども上らず、打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えはこそ、こは何とならん身の果」。

我が立つ袖の比叡山、……、唐土の四明の洞を移し、一念三千の機を顯はして、三千人の衆徒を置き、王城の鬼門を守り、惡魔を拂ふ利劔かや(三國志)

兼平に「扱の比叡山は、……、王城の鬼門を守り、惡魔を拂ふのみならず、……、震旦の四明の洞を移せり、……、我が立つ袖と詠じ給ひよ、……、一念三千の機を顯はして、三千の衆徒を置き」。

【通小町】

拾ふ木の實は何何ぞ、拾ふ木の實は何何ぞ、いちひ、かしひ、馬手葉椎、大小柑子窓の梅、園の桃、人丸がかきはの柿、山の邊のささささ栗くりくりかへす(三國志) 拾ふ木の實は何何ぞ、樺、大葉樺、馬手葉椎、榛、樺、大小柑子窓の梅、園の桃、人麿のかきはの柿、山邊のささ小

栗おりおりかへす(文武五人男) 通小町に「拾ふ木の實は何何ぞ、古し見聞れし軍に似たるは嵐にもろき落樺、歌人の家の木の實には人丸の垣ほの柿、山の邊の笹葉、窟の梅、園の桃、花に名ある櫻麻の生の浦梨、猶もあり機、樺、まてははしひ、大小柑子、金柑、あはれ昔の戀しきは、花橘の一枝」とあるに據つたのである。

ふかくさのせうしやう、夜毎にはなほしと思ひ深草の、榻に通ひし車長持、巡り逢ひたや語りたや(卯月紅葉)

これや深草の少將葉木幡の里か、馬はあれど明日の軍にはかちと見えしは誰やらん(源義經) そなたの空も薄霞、かの深草の少將のその名ばかりやアア残ららむ(娘)

〔深草少將〕卯月紅葉のこの文は、思ひ深きを深草にひひかけ、深草の少將が小野小町に戀想して百夜通ふことを約し、雨の降る夜も降りぬ夜も毎日通うた度歌を車の轡に刻んだといふ故事に據つたのである。「せうしやう」を見よ。

源義經將葉木幡のこの文は、深草の少將を將葉にひひかけて少將菜といひ、深草少將の縁から通小町に「木幡の里に馬はあれども、君を思へば徒歩に勝をいひかけて、徒歩と見えしは誰やらんの文飾としたのである。娘歌加留多のこの文は、深草少將塔も小野小

町塔も山城國紀伊都伏見墨染井南願成寺にあつたによつてかく云うたのである。

百夜も同じつれなさの、小町が名のみ古塚を、小野とはいひて薄生ふ市原野(備八州)

深草四位の少將が小野小町を戀慕し、百夜通ふことを約し、九十九夜通うて遂に思ひを果されなかつたことは、通小町にも見え、また通小町に「或る人市原野を通りしに、薄一葉生ひたる蔭よりも、秋風の吹くに付けてとあるなめあなめ、おのとはいはじ薄生ひけりとあり、是れ小野の小町の歌なり云云」と見えつゝある。

小野とはいひて薄生ふ市原野(備八州)「百夜も同じつれなさの云云」を見よ。

【郡 野】

浮世の旅に迷ひ来て うき世の旅に迷ひ来て、身の果いつと定めん(西王母) うき世の旅に迷ひ来て、夢路をいつと定めん(西王母) 郡野に「浮世の旅に迷ひ来て、夢路をいつと定めん」。

きけんじやう 棟門多く立て並べ出入る人までも、寂光の都喜見城もかくやと思ふばかりの景色なり(用明天皇) 庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸か出入る人までも光を飾る粧ひは、誠や名

に聞きし寂光の都喜見城の樂しみも、斯くやと思ふばかりの氣色かな(女夫池)

【喜見城】喜見宮とも云ふ、天上の宮城で壽羅天王の住む處。郡野に「庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸か出入る人までも光を飾る粧ひは、誠や名に聞きし寂光の都喜見城の樂しみも、斯くやと思ふばかりの氣色かな」。

寂光の豆腐・茶碗酒の樂しみも、かくやと思ふばかりの氣かな(堀山遊)

【寂光】は寂光土即ち佛の住める處である。この文は郡野に「寂光の都・喜見城の樂しみも、かくやと思ふばかりの氣色かな」とあるを作りかへたのである。「寂光の豆腐」とある意味があるわけではない、孕常盤に「南無阿彌豆腐」とある類と同じやうないひ方である。

庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸か出入る人までも光を飾る粧ひは、誠や名に聞きし寂光の都・喜見城の樂しみも、斯くやと思ふばかりの景色かな(女夫池)

夜かと思へば日はまだ高し、梅花開けは菊の花咲けり、秋かと思へば雪も降りて、四季折々の榮華の御所の上籬達も、宮殿樓閣皆消え消えと失せ果てて、ありつる磁の枕の上に眠りの夢は覺めにけり(女夫池)

郡野に「夜かと思へば日はまだ高し、梅花開けは菊の花咲けり、秋かと思へば雪も降りて、四季折々の榮華の御所の上籬達も、宮殿樓閣皆消え消えと失せ果てて、ありつる磁の枕の上に眠りの夢は覺めにけり」。

【咸陽宮】

敵に心をとらかせし咸陽宮の琴の音を思し召し出され、琴柱を律に立替へて、七尺の屏風を越えし唐桃(三國志)

咸陽宮に「花陽夫人が咸陽宮で琴の秘曲を奏して、刺客刑罰を恍惚たらしめ、以て始皇帝の危難を救ふたこと見え、其文中の琴歌に「七尺の屏風は躍らば越えつべし云云」と見えつゝある。

【清 經】

*しゆら 私が爲のしゆらでたち(反魂香) とかく如來の御方便、修羅もやす和女か呼びに来るも彌陀如來(香庚申) 修羅道に遠近のたづきは敵、土は清劍、山は鐵城(千載集)

【修羅】梵語(Aśura)で、六道の二である。冥途の旅は度即ち死裝束を「修羅出立」と云ふ。修羅族は嫉妬猜忌の心盛んで闘争を事とするが故に、猜忌に胸を焦らす「修羅燃す」と云ひ、殺闘争の場を「修羅道」といふ。千載集のこの文は清經に出てある文である。

また修羅道にをちこちの、たづきは敵・雨は矢先、土は清劍山は鐵城、橋樑の劍をそろへ、打つは波・引くは潮、西海四海の因果はここに、これまでなりやこれまでぞと(殊勝)

修羅道では遠近の便りと頼む者は皆敵となり、降る雨は矢となつて我に當り、土を踏めば研ぎ澄した劍となつて我を斬り、山へ登れば鐵城となつて我を防ぎ、橋樑の劍をそろへて恐しい世界となる云云。「西海四海」は檀浦や屋島の合戦を云うたのである。清經に「たづきは敵雨はをちこちの、たづきは敵・雨は矢先、土は清劍山は鐵城、雲のはたてをたづいて、橋樑の劍をそろへ邪見の眼の光、愛欲貪患痴痛患道場、無明も法性もみだるる敵、打つは波、引くは潮、西海四海の因果を見せ、これまでなりや」とあるに據つたのである。

山は鐵城・水は清劍、修羅の鼓・惡鬼の怒り(真言教信)

清經に、「土は清劍山は鐵城、雲の旗手をたづいて橋樑の劍をそろへ、邪見の眼の光」とあるを作りかへたのであらう。

【熊 坂】

いらつて熊坂左足を踏み、鐵壁も通れと突く長刀を、はつしと打つて弓手へ越せば、追つ懸けすかさずこむ長刀に、ひらりと乗れば双向になし、しきつて引けば右手へ越

すき、おつとり直してちやうど斬り(藤静)

「左足を踏み」とは、まづ左足を踏出すをいふ。「こむ長刀」とは突込む長刀。「しまつて引けば」は、あとしまりして長刀を引寄せればといふこと。このあたりの文は、熊坂に見えてゐる。

*こらんにふ 太刀風さわぐ虎の巻、獅子奮迅虎亂入、前をばらへば後にあり(最明寺殿)

「虎亂入」獅道の手の名、刀を揮つてまつしぐらに突入ること。熊坂に「半若子少し恐るるけしきなく、小太刀を抜いて渡り合ひ、獅子奮迅虎亂入、飛鳥の翔の手をくだき。」

*ししふんじん 太刀風さばく虎の巻、獅子奮迅・虎亂入、前を拂へば後にあり(最明寺殿)

上段下段の太刀捌き、陽炎・稻妻・獅子奮迅(國性齋)

「獅子奮迅」兵法の手の名、獅子奮迅のやうな勢あること。熊坂に「小太刀を抜いてわたり合ひ、獅子奮迅・虎亂入・飛鳥のかけりの手をくだき。」

西北に風起り、東南に向ふ空の足、梢木の間もはらはら(雲門松)

熊坂に「東南に風立つて、西北に雲静かならず、夕闇の夜風烈しき山陰に、梢木の間や騒ぐらん。」

東南に雲起つて西北に風静ならず、夕闇の空も轟く雪の夜の、あら物

妻の景色やな(雪女)

雲が東南の空に起つて西北に行けば天候荒れる。熊坂に「東南に風立つて西北に雲静かならず、夕闇の夜風烈しき山陰に、梢木の間やまわらん」安宅に「遼遠東南の雲を起し、西北の雲雷に責められ、埋る憂き身のことわり給ふべきなり。」

薙刀彼處へからりと棄て、手取にせんと大手をひろげ、この面廊彼處の詰り、追掛け追詰め取らんとすれど、陽炎稻妻月の影、姿は見れども手に入らず(十二段)

熊坂に「打物わざにて叶ふまじ、手取にせんと長刀投捨て、大手をひろげて姿の面廊かしこの詰りに、おつかおつかめ取らんとすれども、陽炎稻妻水の月かや、姿は見れども手に取られず」面廊はその條を見よ。

*ひてうのかけり 飛鳥の翔り 虎走り、手を盡してぞ戦ひける(三國志)

上段下段に斬結び、飛鳥の翔りの手を碎き手馬手へ切散し(振袖始)

「飛鳥の翔」獅道の手の名、飛鳥の如く迅速な太刀捌をいふ。熊坂に「獅子奮迅虎亂入・飛鳥のかけりの手をくだき。」

*めんらう 後藤左衛門長刀横たへ駈來り、一人も餘さじと真中に押取込め、此處のめんらう彼處のつまり打伏せ斬伏せ(小栗判官)

この面廊かしこのつまり追掛け追詰め取らんとすれど(十二段)

【面廊】座敷に行く廊下をいふ。熊坂に「この面廊かしこのつまりに、おつかおつかめ取らんとすれども。」

【鞍馬天狗】

實親と親縁を論せぬを花の習ひと聞く(十二段)

和漢朗詠集春の部、白樂天の詩に「通見三人家・花便入、不論貴賤與親縁」。鞍馬天狗に「通に人家を見て花あれば便ち入る、論ぜず貴賤と親縁とをわきまへぬをこそ春の習ひと聞くものを。」

げにや花の下の半日の客、それさへよしみあるものを(十二段)

鞍馬天狗に「げにや花の下の半日の客、月の前の一夜の友、それさへ好みあるものを。」

花あれば便ち入る 花あれば便ち入る科ば櫻に御免あり(本領曾我)

花の美しう咲いてみる見れば、それが何者の庭であらうとも花を愛でて立寄るの意。鞍馬天狗に、「通に人家を見て花あれば便ち入る、論ぜず貴賤と親縁とをわきまへぬをこそ春の習ひと聞くものを。」和漢朗詠集・白居易の詩に「通見三人家・花便入、不論貴賤與親縁」。

花もやうやう景色立つ、花見の使早馬に、鞍馬の山の雲珠櫻(兼好)

「うさぎくら」はその條を見よ。この文は鞍馬天狗に「花咲かば告げんといひし山里の、使は來り馬に數、鞍馬の山の雲珠櫻」とあるに據つたのである。

【花月】

花踏み散らす鶯を打たんといひし人もあり(花好)

花月に「鶯の花踏み散らす細腰を、大長刀もあればこそ、花月が身にたかたきのなげれば、太刀かたなは打つた、弓は的射んがため、又かかると落花狼藉の小鳥を、射て落さんが爲ぞかし。古歌に「鶯の花踏み散らす細腰を、大長刀にかけて切らばや。」

【源氏供養】

そもそも水揚の下前殿のなよやかに、好色の雲をかざし、初牀の夜のやもじにも、結に客衆の花散りぬ、過ぎし御見の夕顔の、露の黄昏身にしみじみと(賀古教信)

源氏供養に「そもそも桐壺の夕べの煙すみやかに、法性の空に至り、露木の夜の雲の葉は、終に覺悟の花散りぬ、空蟬の空し此世を厭ひては、夕顔の露の命を觀じ」とあるを改作したのである。「やもじ」はその條を見よ。

【小袖會我】

時しも頃は建久四年五月半の富士の雲、…よしそれとも數ならぬ身には中中恐れなし(五人兄弟)

小袖會我(御世歌)に出てゐる文である。人知れぬ大内山の山守も、木隠れて

それとは見えす梓弓(五人兄弟)

千鶴集、卷十六、雑上の部に歌に、「人知れぬ大内山の山守は、木隠れてのみ月を見るかな」とあるを引用して、人知れず紛入つて富士裾野の番人にも見咎められぬ意にいうたのである。この文は小袖曾我に「人知れぬ大内山の山守も、木隠れてそれとは見えす梓弓、矢ころならぬは」とあるに據つたのである。「時しも頃は建久四年云々」も見よ。

【櫻川】

あたら櫻の科は、散るぞうらみなる(兼好)
「あたらは可惜である。櫻花散らずにあれよと思ふを、散つて人に惜まれ恨まれるは櫻の罪多の意。この文は櫻川にある。木花開耶姫の御神木云々」を見よ。

岸花紅に水を照し、とうじゆ縁に風を呑む、山花開けて錦に似たり、澗水たたへて藍の如し(西王母)

「岸花紅照水、澗樹翠含風、山花開似錦、澗水湛如藍、柳川に見えてあや文である。岸花紅照水、澗樹翠含風は杜子美が詩句で、「山花開似錦、澗水湛如藍」は碧巖録巻九に出である詩句である。

木花開耶姫の御神木の花なれば、風もよきて吹けや吹け、あたら櫻のとがは散るぞ恨なる、よし恨むまじ歎くまじ、泣くまゝ泣くまゝい啼かぬ鳥の聲きけば、生れぬ先の我

子戀しき(兼好)

木花開耶姫の御神木にてまします、されば櫻は木花開耶姫の御神木の花なれば、風も避けて障らぬやうに吹けとの意。あたら櫻のとが云云」はその條を見よ。六道輪廻の説つては鳥かも知れぬ、さう思へば鳥の聲を聞きて生れぬ先の我子戀しいとの意。櫻川に「木花開耶姫の御神木の花なれば、風もよきて吹き水も影を濁すなど、……あたら櫻のとがは散るぞ恨なる、……我尋ぬる櫻子ぞ戀しき。

【實盛】

故郷に錦、故郷にかざる唐錦(最明寺殿) 故郷へ歸る唐錦(國性齋) 故郷へは錦を着て歸るといへる本文あり(大磯虎)
「富貴不歸故郷、如衣錦夜行」。魏志に「太祖謂既曰、還君本州、可謂衣錦書行矣。南史、劉之隣傳に、實盛に南郡太守、武帝謂曰、令卿衣錦還鄉。實盛に、故郷へは錦を着て歸るといへる本文あり。

さねもりぢや、それでは一年五兩か、いかにもいかに近年五兩取ります、すれば其方は實盛ぢや、道理で女中の氣に入つた(薩摩歌)
「實盛ぢや」薩摩實盛御領につけられた故事により、御領と五兩と音相通じることよつて「實盛ぢや」といひ、實盛(いさね)を除後に通はせて、「道理で女中の氣に入つた」と洒落したので

盲龜も浮木に逢ふ(以呂波)

「眼の龜の浮木に値ふを見よ。實盛に「此稱名の時節にあふ事、盲龜の浮木、僂僂誰の花待ち得たる心地して」。老武者の悲しさは、風にちぢめる枯木のかも折れて(西王母)
實盛に、「老武者の悲しさは軍には仕疲れたり、風にちぢめる枯木のかも折れて」。

【自然居士】

*しう 黃帝車を以て鞠を作らせ、蚩尤が首を表し、諸人の足にかけさせ調伏あり(持統天皇) 豈尤といひし朝歌薺り、烏江の海を隔て亡すべき様なかりしに(持統天皇)
「蚩尤」支那上古の人、黃帝と颯鹿の戦ひ敗れて、捕にされた。自然居士に「蚩尤といへる逆臣あり、彼を」さんとし給ふに、烏江と云ふ海を隔てて攻むべき様なかりしに。「黃帝車を以て鞠を作らせ云云」を見よ。

然れば船のせんの字を君にすすむと

書きたり(八宮)

自然居士喜多流に「然れば船のせんの字を君にすすむと書きたり」。謡曲拾遺抄に「これを註して、説文曰、前本作舟、不行而進謂之船、从舟上在舟上、徐曰、坐而至舟也、私云、前少字又舟とも云也、舟のせんの字と云は舟の字を云也、すすむとつり、君にすすむとは君は添字也、すすむとつり、船が舟に君の字一字加へて云なるべし」と和漢音釋書言字考、言辭部に「舟、音鏡、(句會)前ノ本字、先也進也」。

じぬんこし 此裝束で直に爰で自然居士を見せうかの、わきの人買が櫓櫓を持つて散散に打つ(酒吞童子)
「自然居士」自然居士を云ふ。自然居士は東山雲居寺の住僧である。居士が説法の場に講論を上げに來た女兒があつた、この女兒が人商人に捕へられて連れ行かれるを、自然居士力を盡して遂に女兒を助返したことを作つてある。自然居士に「(居士)舟に離れて叶はじと雲櫓を渡にひたしたつ、舟はたに取付き別む、(人商)あら腹立つ、身ながら衣に恐れて入は打たず、是も汝女が料ぞと、櫓櫓を持つて散散に打つ、打たれて響の出でざるは若し空しくなりつらん、何しに空しくなるべきと引立て見れば、身には唾・口には綿の響をはめ、泣けども聲を出でばこそ」。

身には綿口には綿の響をはめ、泣けども聲の出でばこそ(酒吞童子)
自然居士にある文である。

【猩 猩】

秋の夜の盃、影も傾く入江に枯れ立つ、足もとよよろよと(吉岡梁)

この文は猩猩に出てゐる。

老いせぬや薬の名をも 老いせぬや

薬の名をも菊の水、盃も浮み出で(一心五戒魂) 老いせぬや薬の名をも菊の(酒(女夫池))

「老いせぬ」は年寄らぬの意。「菊の酒」をも見よ。猩猩に「老いせぬや薬の名をも菊の水、盃も浮み出でして。」

酌めども盡きず 酌めども盡きず、飲めどもかばらぬ(浦島) 酌めども盡きず、飲めども酔はぬ(菅庚申) 猩猩に「酌めども盡きず、飲めども酔らぬ秋の夜の盃。」

【正 尊】

*さがなし 身の役なれば、君達をさがなくせて逢はせれば(三世相) 岩戸に籠り給ひげん例さがなき嵯峨の山(嵯峨天皇) あはれ人の口はさがなきもの、御兄弟の中いづれか主にてましますや(猿蓑) 神代紀に「悪」「不祥」「不良」などの字が訓んである。詞きたなくいしるをいふ。藤静胎内猪のこの文は、正尊に「さはあるま

じきと申されてこそ、御兄弟の御中に物のひさがなきことあるまじけれ」とあるに據つたものである。

みやうだう 五大明王、四大薩陀、三十七尊、過去七佛、冥道を請じ

驚かし奉り(藤原) 道満は冥道供一字金輪の法を修す(弘徽殿)

「冥道」幽冥界にまします神佛を總稱する詞である。「冥道供」とは閻魔王及び其眷族等を供養すること。藤原胎内猪のこの文は正尊に「上は梵天、帝釋、四大天王、閻魔法王、五道の冥官、泰山府君、下界の地には伊勢天照大神を始め奉り、伊豆・相模・富士・浅間・鹿野三所、金峯山、玉城の鎮守、稻荷・祇園・加茂貴船・八幡三所、松の尾・平野、總じて日本國の大小神祇、冥道請じ驚かし奉りしとあるを作かへたのである。「冥道供」一字金輪の法とある。「二字金輪」はその條を見よ。

【石 橋】

譯つては半日の客 谿の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし、げに謬つては半日の客たりしも、今身の上(白雲)(以呂波)

石橋に「谿の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし、げにや誤つて半日の客たりしも、今身の上(白雲)に知られたり。和漢朗詠集 卷下、雜部、後江相公の詩に「謬入仙家、雖爲半日之客、恐歸舊里、終逢七世之孫」とある句によつたのである。劉晨阮肇が天台山に入り、道に迷うて美女に逢ひ、これと半日遊ん

で家に歸れば、既に七世を経てゐたと云ふ、續齊諧記に載せてある話によつて、かく作つたのである。

【俊 寛】

七百年生きる仙人の薬の酒とは菊水の流れ(女護鳥)

俊寛に「酒と申すことはもと薬の水なれば、醜酒にてなど無かるべき、……、彭祖が七百歳を経しも、心を汲みえし深谷の水、飲むからにげにも薬と菊水なり。」

襪に取り付きて、言ひ疑せし事のあり、暫くうと引切つて、船を深みに漕ぎ出せば、設方波に身を浸し、只手を上げて、船よのう船よと、呼べど出船の(國性爺)

俊寛に「襪に取り付き引止むる、舟人しもづな押切つて、船を深みに押出だす、設方波にゆられながら、只手を合はせて、船よのう船よと、いへど乗せざれば。」

もとより此鳥は鬼界が鳥と聞くなれば、鬼ある所に今生よりの冥途なり、たとひ如何なる鬼神なりと此哀れなどか知らざらん(女護鳥) 俊寛にある文である。「鬼界が鳥」は地名部「きか」を見よ。

らしいし、もしやとらしいを尋ねても、僧都とも俊寛とも書きたる文

字のあらばこそ(女護鳥) 「禮紙」書状の本紙(近松のこの文では敵文の書いてある)の外に同質の白紙で一枚巻き重ねてあるものをいひ、その内容を重んずる爲のもので、その名もその意味で付けられた。真丈雜記「書状に都下、「書状にらしい」と云ふは、文字を書き残したる白き所をらしいと云ふ人あり誤なり、らしいは禮紙と書き、状の上を白紙にて巻く事なり、扱其上を上巻とて別の紙にて包みて宛所を書くなり、これひねり文の事なり、禮文にも禮紙あるなり、書札雜難問書に「上、禮紙にて在之は立文は杉原一枚に書き其上一枚禮紙、扱上巻横に巻きて上下をひねり候也。又こし文の禮紙は三つ一つほど切りて巻きて扱上巻たるべく候云云。」俊寛に「もしも禮紙にやあるらむと、巻きかへして見れども僧都とも俊寛とも書ける文字は更になし。」

【鐘 旭】

しちたらじゆ 恐れて虚空に飛上り

其高さ七多羅樹(振袖樹) 「七多羅樹」四十九伐ほどの高さといふ「多羅樹」は印度に生茂し樹欄の如き樹である、この樹の高さの七倍なるを七多羅樹と云ふ。翻譯名義集に「舊云貝多、此翻岸、形如此方樹欄直而高、極高長八九十尺、華如薔米子、有入云、一多羅樹高七伐、七尺曰伐、是則樹高四十九尺」鐘旭に、「傳へ聞く、佛在世の淨藏淨眼の如く其高さ七多羅樹、虚空に上りては坐せしめ。」

【隅田川】

和女は都詞狂女と見えし、面白う狂うて見せずば舟に乗せじとありし故、うたてやな隅田川の渡守ならば、日もはや暮れぬ舟に乗れとはいひもせて、舟に乗るなど仰あるは名にも似ず、おお野暮らし(隅田川)

謡曲・隅田川(菅冬流)に「都の人なりとも見れば狂女なる程に、面白う狂ひ候へ、狂はずは舟には乗すまじいぞ、うたてやな隅田川の渡守にたまはまば、日も暮るる舟に乗れとこそ仰あるべきに、かたの如くは都の者を舟に乗るなど承るは、隅田川の渡守も覚えぬ事なたまはまば」と「隅田川の渡守ならば云々」をみ見よ。

隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乗れ、とは言ひもせて舟に乗るなど仰あるは名にも似ず(隅田川)伊勢物語に「武藏の國と下總の國との中にいと大なる河あり、それを隅田川と云ふ、……渡守は舟に乗れ日も暮れぬ事なたまはまば、乗りて渡らんとす」とあるによつてかく云うたのである。但この文は謡曲・隅田川に據つたのである。「おことは都詞云々」を見よ。
南無西方極樂世界三十六萬億、同號同名阿彌陀佛南無阿彌陀(隅田川)
南無や西方極樂世界には三十六萬億の世界ありて、それに各同號同名の阿彌陀佛はします

の意。この文は淨土念佛宗の要文であつて、謡曲・隅田川にも出てゐる。

都の人の足手影のなつかしと、これを最期の記念の詞轉寐の夢と消え給ふ、土中に突込み柳を植ゑし頃御遺言(隅田川)

謡曲・隅田川に「都の人の足手影もなつかしう候へば、此道の邊りにつき籠めて、しるしに柳を植ゑて賜はれとおとなしやかに申し云々」とあるに據つたのである。

【善界】

大びえや横川の杉の梢に棲みて、……横川の杉の嵐に立紛れてぞ失せにける(天神記)
善界に「大比叡や横川の杉の梢より、南に積く如意が猿轡の柳山、雲や霞も嵐と共に失せにけり。」

若作障障即有一佛魔境(天神記(田村)(用文章)

観法を修する時、若しも悪魔來つて障魔をなすとも、悟を開いて觀れば本来魔も佛もその隔なく、一體のものなれば取て恐れるに足らないの意。善界に「若作障障即有一佛魔境と説けり。」

【關寺小町】

古は一夜とまりし宿までも、錦の裾綾の床、垣に金花をかけ戸には水

晶を連ねつつ、寶輿麗車の玉衣の、隙間の風もいとひしに、斯くあさましき苦筵、敷くともしかじ世の中よ(體丸)

關寺小町に「古は一夜泊りし宿までも肌理を飾り、垣に金花を懸け戸には水晶を連ねつつ、寶輿麗車の玉衣の、色を飾りて敷妙の枕つつまきの内にしては、花の錦の裾の起き臥しなりし身なれども、今は殖生のこや玉を敷きし床ならん。」

關寺に身の衰への恥かきし今の小町屋惣七(博多)

心の急くに關寺をいひかけ、關寺小町に、小野小町が關寺のほとりに住みて、身の衰へたのを恥かしがつたことが見えてゐるに據つて、今の小町屋にいひつづけたのである。

【攝待】

岩木を分けぬ人心、眞黒に焦げるまであつたつてお歸りなされかしと、いへどもさすが一言も、いは木をわけぬ人心、奥の一間に入りにつけり(重井翁) 岩木を結ばぬ義經なれば、泣く泣く膝に抱き取る(凱陣八島)

「岩木を結ばぬともいふ。人は木石をわけて生れたるものでないから、その心には情があるとの意の譬。行路難に云、「心非石木、豈無

感。凱陣八島のこのあたりの文は、攝待によつたものである。

*うづぼ 馬に鞍置き弓扱おこせ、君の御供申さん(凱陣八島)

「鞍置申入れて背負ふ具。矢を雨などに濡さぬやうに、又物に觸れて損ぜぬ爲に納め置くもので、中空であつて外に毛皮をかけたのが多い、その形葉の種に似てゐるから「うづぼ」(空穂)と云ふのである。凱陣八島はこのあたりの文は攝待によつたのである、併せて見よ。

かけずたまらず、繼信が着たりける鎧の胸板押付總角、かけずたまらずつと射通し(凱陣八島)
二の文は攝待にある文である。但謡曲改正本には「總角かけてつと射通し」となつてゐる。
舊里を出てし鶴の子の松に歸らぬ淋しさよ(凱陣八島)
このあたりの文は攝待に據つたのである。漢時代の人、遼東の丁合威が仙を靈虛山に學ぶ、化し鶴となつて遼に歸り、「有鳥有鳥丁合威、去家千年今始歸、城郭如故人民非、何令學仙疲費熱」と言つたらしい。

*ごしやう わしや今斬らるる助け下され、大阪へ連れていて下され、後生でござる、泣き拜む(女殺) 現世の祈の爲にもあらず、後生善所とも思はず(凱陣八島)

「後生後生善所の略。現世で善事をなす者は未來世に於て善き所に生れるといふ。凱陣八島のこの文は攝待によつたものである。

*すずかけ さらば小きき兜巾篠懸

をこしらへて給はれ、山伏道の御
供せん(亂陣八島) 旅の衣は篠懸
の、露けき袖やしほらん(孫助)

「篠懸」山伏の上衣に著る法衣である、麻で作
り絲織または金織を著く。山伏の穿入する時
に篠の露を防ぐ爲に著るため、もとは錦を
附けたあつたが、後には威儀を保つ爲に著る
物となつた。亂陣八島のこの文は、攝待
に「さあらば思出したり、小きき兜巾篠懸を
とく拵へてたび給へ、山伏道の御供せん」と
あるに據つたものである。篠懸胎内拵のこ
の文は、安宅の文に據つたものである。旅の
衣は篠懸の云々」を見よ。

*せつたい これに高札の立ててあ
り、何何佐藤の館にて山伏接待と
候(亂陣八島)

「接待」客をもてなすこと。追善の爲に人に施
しをすること。「山伏接待」とは、山伏に物を
施與しめてなすこと。亂陣八島のこのあたり
の文は攝待に據つたものである、併せ見よ。

*やつば 矢壺をさしてひやうと放
つ(亂陣八島)

「矢壺」矢を射立つねらひの所「壺」は思ふ器
などといふ器で要所の意。亂陣八島のこのあ
たりの文は、攝待に據つたものである。

【蟬丸】

あふ坂の知るも知らぬも かかるう
き世に逢坂の、知るも知らぬもこ

れ見よ(蟬丸)

逢坂は京都と大津との間にあつて遊賀郡に屬
し、街道に蟬丸祠があり、昔は開所があつた。
後撰集、雜部、蟬丸の歌に、「れきこの行く
も歸るも別れては、知るも知らぬもあふ坂の
間」。なほこの邊の文は、謡曲、蟬丸によつた
ものである。

雨による田藁の鳥、これは雨による
田藁の鳥と詠ぜし藁か(蟬丸)

謡曲、蟬丸に、「これは雨による田藁の鳥と詠
み置きつる、藁と云ふ物か」。果林子のこ
のあたりの文は、謡曲、蟬丸によつたものであ
る。古今集、雜上部、紀貫之の歌に「雨により
田藁の鳥をけよ行けば、なほは隠れぬ物にぞ
ありける」。

一粒の花の種は地中に朽ちず、終に
千林の梢に上る(國性齋)

蟬丸に、「夫れ花の種は地に埋つて千林の梢に
上り、月の影は天に懸つて萬水の底に沈む」。

御兩眼言ひさせ給ひ、蒼天に月日
の光なく、暗夜に燈火かけくら
き(蟬丸)

謡曲、蟬丸に、「兩眼言ひましまして、蒼天に
月日の光なく、暗夜に燈暗うして」。

宣言黙止難くこれまで供奉せしめ候
へども、何處に棄て申すべき、…
王子は跡に唯一人琵琶を抱きて竹
の杖、伏し轉び、さらばさらば聲
のばかり(蟬丸)

謡曲、蟬丸に、「宣言にて候ほどにこれまで御
供申して候へども、…琵琶を抱きて杖を持

ち、伏し轉びてぞ泣き給ふ」とありてこの
文總て謡曲の文と大同小異である。

*梅檀は二葉より香し(吉野郡女楠(曾
我五人兄弟(千載集))

梅檀は既に療の時か香気がある、賢者と仰
がれるべき人物はその幼少な時から既に凡庸
でない。謡曲、蟬丸に、「それ梅檀は二葉より
香しと云へり」。觀佛三昧經に、「梅檀根芽漸
新生長、緣成成樹、香氣昌盛」。

第一第二の絃は乘索として、秋の風
松を拂つて疎韻落つ、第三第四の
宮は、我蟬丸の調も四つのをりか
らなりける村雨かな(蟬丸)

「乘索」は物の消え盡きようとする貌。「疎韻」
とは絶え絶えにして物淋しら響を云ふ。四つ
の絃は四絃のことで即ち琵琶を云ふ、そし
て絃を「折かしの」を「しひかけた」のであ
る。「村雨」は霽雨であつて、「響つ強く降
る雨即ち白雨を云ふ。謡曲、蟬丸に、「第一第
二の絃は乘索として、秋の風松を拂つて疎韻
落つ、第三第四の宮は、我蟬丸が調も四つ
のりからなりける村雨かな」と和漢朗詠集、雜
下部に「第三第四絃冷冷」。

みさぶらひみかさ、これは御侍御笠
とよみし物よなう(蟬丸)

「御侍御笠」古今集、大歌所御歌の部に、「みさ
ぶらひ御笠とよみせ宮城野の、木の下露は雨
にまされりて見えてある。「みさぶらひ御笠
とよみせ」とは、侍臣の御笠を召し給へと申せ
の意である。蟬丸のこのあたりの文は、謡曲、
蟬丸に據つたのである。

世の中は宛にも角にも假の宿、傘一

本に起き臥すも(蟬丸)

謡曲、蟬丸に「世の中は宛にも角にもありぬ
べし、宮も葺屋も果せしなれば」。

わくや、こゝは所も逢坂山、關のわ
くやの竹柱、かかる浮世にあふ坂
の(蟬丸)

山本九兵衛版七行本のこの文に「わくや」と
あれど「わらや」(葺屋)の誤である。謡曲、蟬
丸に「こゝは所も逢坂の、關の戸ぎしの葺屋
の竹の杖柱と頼みつる父帝には捨てられて、
かかるうき世にあふ坂のし見えてある。
果林子のこの謡曲の文に據つたのである。

【千手】

森の下風木の葉の雫、落人の身とな
り給ふ(嬭山遊)

千手に「森の下風木の葉の露、おとされける
こそあはれなれ」。

【卒塔婆小町】

乞ひ得ぬ時は悪心また狂亂の心つき
て、のう物給へのうお侍(西王母)

卒塔婆小町に「乞ひ得ぬ時は悪心また狂亂の
心つきて、聲かはりけしからず、のう物給へ
のう御侍のう」。

これにつけても後の世を願ふぞ誠な
りける、砂を塔と重ねて黄金の膚
こまやかに、花を佛に手向けつ

悟の道に入らうよ(釋迦)

卒塔婆小町に出てる文である。

百年經ねど衰へは、今身の上に小町屋惣七(博多)

卒都婆小町に「うれしからぬ月日身に積つて、百年の姥となりて候」とあるに據つたのである。

【道成寺】

鐘の供養に参るらむ (用明天皇)

道成寺に、「つくりし罪も消えぬべし、鐘の供養に参らむ。なほこのあたりの文は、道成寺の翻案である。

謹請東方青龍清淨、謹請西方白體白龍、謹請中央黃體黃龍、一大三千大千世界の恒沙の龍王哀憫納受、哀懇自護のみぎんなれば、いづくに恨みのあるべきぞと、祈り祈られかつばとまらぶと見えけるが(用明天皇)

あらゆる龍王に祈る文である。「恒沙」はその條を見よ。「哀懇自護のみぎん」は哀懇自護の詞で、即ちあはれみ給はれて自ら護まれる時節との意。道成寺に、「謹請東方青龍清淨、謹請西方白體白龍、謹請中央黃體黃龍、一大三千大千世界の恒沙の龍王哀憫納受。哀懇自護のみぎんなれば、いづくに大蛇のあるべきぞと、祈り祈られかつばとまらぶが又おきまがつて」。

これはこの國の傍に下種奉公の勤を致す飯焚の女にて候(用明天皇)

道成寺に、「これはこの國の傍に住む白拍子にて候。

「言語道斷」 言語道斷この上は何をか隠し申すべき(凱陣八島) 言語道斷かやうの事を思ひてこそ女人禁制とは申しつれ、總じて鐘の供養に女人をいましむる因縁は(用明天皇)

言語に述べる道の断えた義、沙汰の限り。道成寺に、「言語道斷かやうの義を存じてこそ同く女人禁制の中申して候に、……此鐘に付きて女人禁制と申しつるいはれの候を御存じ候か、……」。感山雲臥記談の序文中にも「言語道斷」といふ語が見えてゐるから、もと佛書から出た詞である。

さる程に尾上の鐘の、月落ち鳥啼いて霜雲天に滿ちじほ程なく、この浦波の江村の漁火、愁に對して人人眠ればよき隙ぞと、立舞ふやうにて狙ひ寄つて撞かんとせしが、思へば鐘さへ恨しやとて、龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見えし、引かづきてぞ失せにける(用明天皇)

道成寺に、「さる程に寺の鐘、月落ち鳥啼いて霜雲天にみちじほ程なく、日高の寺の江村の漁火愁に對して人人眠ればよき隙ぞと、立舞ふやうにて狙ひ寄つて撞かんとせしが、思へばこの鐘恨しやとて、龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見えし、引かづきてぞ失せにける。」「月落ち鳥啼いて」はその條を見よ。「龍頭は鐘の釣つてある所に龍頭の形の金物が附いてあるよりの程。

月落ち鳥啼いて霜天に、滿ちじほ程なく此浦の、江村の漁火、愁に對して人人眠れば(用明天皇)

道成寺に據つたものである。さるほどに尾上の鐘の云々」を見よ。三體詩、唐張翥の詩に、「月落鳥啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、杜鵑城外聲山寺、夜半鐘聲到客船」。

月は程なく入しほの、煙みちくる小松原(用明天皇)

道成寺に、「月は程なく入しほの、煙みちくる小松原、急ぐ心かまた暮れぬ。」

つくりし罪も消えぬべし (用明天皇)

道成寺に、「つくりし罪も消えぬべし、鐘の供養に参らん。」

なまなくさまんたばさらだせんだまかろしやなそはたやうんたらあんだらども(女護島) なまなくさまんたばさらだせんだまかろしやなそはたやうんたらたかかんまん、ちやうがせつしやとくだいぢあゑ、ちがしんしやそくしんじやうぶつ(用明天皇)

不動明王の慈教咒「爾護の義(三皇多) 普遍補日羅載の義(摩阿路迦摩拳) 忿怒の義(薩破死也) 怖(恐怖) 他(際同) 憾(憾) 給(給)」である。平家女護島のことの文は、この慈教咒の末を「あんだら」その條を見よにひなしたものである。用明天皇職人鑑のこの文は、慈教咒から「爾我説三者得三智照、知我身者即身成佛」といふ經

文につづけたので、道成寺の文に據つたものである。花の外には松ばかり (用明天皇)

道成寺に、「花の外には松ばかり、暮れそめて鐘やびくらん。」

焔を降らし火炎を吹きかけ釣鐘を奪ひ失ふと傳へたり、なんぼう恐しき事にてはなきかと語り給へば、人人は身の毛を立ててぞ怖れける(用明天皇)

道成寺に、「焔を出し尾をもつてたれば、鐘はずなば恐湯となつて山伏をとり終はんぬ、なんぼう恐しき物語にて候ぞ、言語同斷かある恐しき御物語こそ候はぬ」とあるに據つたのである。なほこのあたりの文は道成寺に據つたのである。

【高砂】

かけども盡きぬ松の葉 (國性後夜日)

高砂に、「撞けども落葉の盡きせぬは、まことなり松の葉の。」

木の下降の落葉かくなるまで夫婦長らへて、子供の末を高砂の、松の葉えや祈るらん(鐘樞三)

高砂に「所は高砂の尾上の松も年ふりて、老の波も寄りくるや、木の下降の落葉かくなるまで命ながらへて。」

を遠へず、陽春の徳をそなへて蘭枝花はじめ
て開く。

さすかひなには壽福の枝、をささむる
手には不老の枝(反魂香)

手を伸べるを「さす」といひ、手を引くを「を
ささむ」といふ。共に舞の手の名「かひな」
は腕。「壽福」も「不老」も舞の語を以て枝を形
容したのである。高砂に「さすかひなには惡
魔を拂ひ、をささむる手には壽福をいだき。」

しかないなみ、これ祝言の盃と一つ受
けて元信に、妻の歪いただく作法
儀式は堅うと、四海波腰元中が諺
ひつれ(反魂香) 四海波静にて國も
治る時(風門出八島)

「四海波」高砂の四海波の段をさす、即ち「四
海波」がたて國も治る時つ風、枝を鳴さ
ぬ御代なれや、あひに相生の松こそめで大か
りけれ、げにや仰ぎても事もおろかや斯る世
に、住める民としてゆたかなる、君のあやみぞ
ありがたき」をいふ。此の語は婚禮などの祝
宴の際で語つたものである。門出八島のこ
この文は高砂の四海波の段の文に據つたので
ある。

任吉に立歸り歸朝を待ち申さんと、
夕波の汀なる蟹の小舟を漕ぎ戻
し、追風に任せつつ沖の方に出て
にけりや、沖の方へぞ(國性爺)

「高砂に」任吉にまづ行きてあれにて待ち申さ
んと、夕波の汀なる海人の小舟に打乗りて、
追風に任せつつ沖の方に出てにけりや、沖の
方にぞでにけりし。

*せんしうらく 千秋樂を誦うて目
出度う御立ち候(兼好) 千秋樂は
民を撫で、萬歳樂には命を延べ、
げに相生の松の風枝をならさぬ御
世なれや(根元吾我) 千秋樂は民衆
え、萬歳樂には命を延ぶ、相生の
松風颯颯の聲ぞ目出度けれ(蛭合歌)

千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命
を延ぶ、相生の松風さつさ(薩摩歌)

「千秋樂」樂調の雅樂の曲名。萬歳樂は平調
の樂である。高砂に「千秋樂は民を撫で、萬
歳樂には命を延ぶ、相生の松風颯颯の聲ぞ樂
しむ。」

高砂の尾上の金も皆になり、まだ借
錢に帆を上げて、波の淡路や見る
影なき、貧になる尾の裏借屋、は
やすぎはひに唐人の行列賣と罷成
る(大悪冠)

「高砂に」高砂の尾上の鐘の音すなり、……此
浦船に帆をあげて、……波の淡路の島陰や、
還くなる尾の沖過ぎて、はや住の江に着きに
けり」とあるを作りかへたのである。

高砂や此浦船に帆をあぎよよ、月諸
共に出舟や、はや住の江の(天鼓)

「高砂に」高砂や此浦船に帆をあげて、月諸共
に出でしほの、……はや住の江に着きにけ
り」とあるを作りかへたのである。「あぎよ
よ」はその條を見よ。

【竹 雪】
吳山にあらねども笠の雪の重さ
よ(安夫池)

吳の地を通る時は雲雪を降らして、笠の重
くなるまで積たると云ふことがあるが、此處
は吳山ではなけれど、笠に降り積る雪の重
きこととの意。竹雪に「吳山にあらねども笠
の雪の重さ」と、鶉城に「笠は重し吳山の雪」。

詩人玉屑に「吳山皆有雪、何所不爲家、笠
重吳天雪、鞋香楚地花。」蘇省あたりが吳地
で、湖廣あたりが楚地で、兩地相接してゐた
のである。

【忠 度】
あまよのものがたり 心は古にまよ
ふ雨夜の物語申さん爲に、魂魄に
うつりかばりて來りたり(千載集)

「雨夜の物語」雨夜は消暗くして踏迷はげ、迷
ふ雨夜といふたのである。雨夜の物語とは、
源氏物語桐木の巻に光源氏と馬頭との女品
定めの名高い文あれば、それでいうたので、
雨は降へたまふ。忠度には「覚ゆる心は古に
迷ふ雨夜の物語申さん爲に、魂魄にうつりか
はりて來りたり」。

花をも憂しと捨つる身の、月にも憂
は厭はじ(持統天皇)

花をも憂しと捨てて心を留めぬ身は、月に雲
がかかつて光を掩ふも厭ふ心もないと、更に
執着なき淡き運世の身をいうたのである。こ

この文は忠度に出てゐる。
蘭菊の狐川 心の花か蘭菊の狐川に
ぞ着き給ふ(千載集)

白氏文集第一。凶宅詩に「長鳴松桂枝、狐
藏蘭菊蓋」笑」とあるを應用して狐に狐川を
いひかけたのである。狐川は京都の海印寺
村との間を流れて水蓮村の南で淀川に落ちる
川の名。忠度に「心の花か蘭菊の狐川より引
返し」。

【田 村】
げにや安樂世界より、今この婆婆に
示現して、我等が爲の觀世音、仰
くも高し(曾根橋)

「安樂世界」「婆婆」「示現」はその條を見よ。
田村に「げにや安樂世界より、今この婆婆に
示現して、我等が爲の觀世音、仰ぐもおろか
なるべしや」。

げんぢやくおほんにん 兩足掴んで
二つにさつと掴み裂き、雲井遙に
入り給ひ、終にげんぢやくおほん
にんの敵は亡び失せにけり(天神記)

「還著於本人」法華經「普門品」觀音經に「咒
誦諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音力、還著於
本人」とありて、人を咒誦し、また諸毒藥を
以て害せうとする者あつても、觀世音を祈念
すればその功力によつて、其禍は還つて人を
咒誦したり諸毒藥を以て害せうとする本人の
身の上にとどむる意。田村に「誠に咒誦諸毒
藥、念彼觀音の力をあはせて、すなはち還著
於本人の敵は亡びにけり」。

申す女にて候、扱も頼光例ならず惱ませ給ふにこり、典樂の頭より御樂を持ち、只今頼光の御所へ参り候。なほこのあたりの文は土蜘蛛に據つてゐる所が多い。

七尺餘の蜘蛛の形千筋の絲を纏懸け(賀古教信)

土蜘蛛に「七尺許の蜘蛛となつて我に千筋の絲を纏懸けしを。」

土も木も大君の國なれば、いづくか鬼のやどりなる(關八州)

土蜘蛛にある歌である。太平記には「草も木も我大君の國なれば、いづくか鬼のやどりなる」と見えてゐる。

汝知らずや我そのかみ、南閩浮州に婚り、葛城山に年を経る土蜘蛛の精靈なり、大日本を横領し覺界になさんと(關八州)

土蜘蛛に「汝知らずや我むかし、葛城山に年を経し土蜘蛛の精靈なり、なほ君が代に障りなさんと。」

わがせこが來べき宵なりささがにの、蜘蛛のふるまひかねてよ(關八州)

「わがせこ」は吾天子の義、我兄の君ともいふ。「ささがに」はその條を見よ。往昔蜘蛛の振舞を見待つ人の來べき占をした。この文は土蜘蛛に「我せこが來べき宵なりささがにの、蜘蛛のふるまひかねてより云云」とあるに據つたのである。

【定家】

式子の君の浮名立つ、定家葛の這ひかかる(兼好)

定家に「式子内親王始は賀茂の齋の官に備はり給ひしが、程なく下り居させ給ひしを、定家の御忍び忍びの御製淺からず、其後式子内親王程なく空しくなり給ひしに、定家の執心葛となつて御墓にはままとひ、互の苦しみ離れやらす」と見えてゐる。

【天鼓】

同じく置の鼓をすゑ、絲竹呂律の聲ぞ有難き、頃は初秋の空なれば、はや三伏の夏たけ、風一聲の秋の空、夕月の色も照り添ひて、見ぬ唐も(天鼓)

謡曲天鼓に、「同じく天の鼓をすゑ、絲竹呂律の聲に、法事をなして亡き跡を、御用ぞ有難き、頃は初秋の空なれば、早三伏の夏たけ、風一聲の秋の空、夕月の色も照り添ひて、水宿酒として。」

けしたるもの 不思議やな、はや更け過ぐる宵月にけしたる者の見えたるは、如何なる者ぞ名を名のれ(天鼓)

の見えたるは、如何なるものぞ名を名のれの、星は北にたんだくの天の海づら(天鼓)

「こいだく(手抱)の釋である。兩手を前に合せて拜すること、即ち拱するをいふ。廣徳に、「拱、手抱也矣。増福に「兩手合持曰拱矣。この文は、人間界の水は南に向つて流れ行き、衆星は普北極星の方に向つて拱する意である。謡曲天鼓に「人間の水は南、星は北にたんだくの、天の海づら雲の波立添ふや。」

地を走る獸空をかける翼まで、親子のあはれ知らざるや、況んや佛性同體の人間、子と生れ親とな(兼好)

天鼓に「地を走る獸、空を翔る翼まで、親子のあはれ知らざるや、況んや佛性同體の人間、此生に此身を浮べずは、「佛性同體」はその條を見よ。」

傳へ聞く、孔子は鯉魚に別れ、思の火をば胸に焚き、白居易は又我子を先立てて枕に礎る藥恨む(歌念佛)

ある。その詩文は自然の風致を備へ、温厚和平である。聖徳太子繪傳記のこの文につきては「しらべ合せし三つの鏝云」を見よ。五十年忌歌念佛のこの文は天鼓に據つたもので「傳へ聞く孔子は鯉魚云」を見よ。

水宿酒として波悠悠たり、あら有難の御用ひやな、勅を背きし天罰に又に伏したる身にしあれば、後の世までも苦しみの海に沈み波に打たれて、呵責の實もひまなかりしに、思はざる外の御用に浮び出てたる有難さ(天鼓)

謡曲天鼓に「水宿酒として波悠悠たり、あら有難の御用やな、勅を背きし天罰にて瀧水に沈みし身にしあれば、後の世までも苦しみの海に沈み波に打たれて、呵責の實もひまなかりしに、思はざる外の御用に浮び出でたる瀧水の上」とあるに據つたのである。

夜遊の舞樂も時去つて、五更の一點鐘も鳴り、鳥は八聲のほのぼのと、夜も明け白む時の鼓、數は六つの巷の聲に、また打寄りて天鼓か夢まぼろしならぬ姿を見よ(天鼓)

り来る東が白む、五更の一點鳥も
ばらばら鐘も鳴る、数は六つの衝
の聲、又立寄つて門の戸を、現
か夢かあけやらぬ、恨みを礎して
歸りけり(女夫池)

天鼓に、夜も更けて夜半樂にもはやりぬ、
人間の水は南、星は北にたんだくの、……、
五更の一點鐘も鳴り、鳥は八聲のほのほの
と、夜も明け白む時の鼓、歌は六つの衝の聲
に、又打ち寄りて現か夢か、……、幻とこそ
なりにけれ。

【東北】

かんでいのまつのかぜ 湖底の松の
風、讀誦の經におとづれて猶も殊
勝ぞまさりける(大羅冠)

「湖底の松の風」谷底を吹き渡る松風、東北
に「湖底の松の風、一聲の秋を催して」
櫻花散りても終に根に歸る(蝦山遊)

【融】

げにや古へも、月には千賀の鐘籠
の、浦曲の景色眺めん(融大臣)

融に「げにや古へも、月には千賀の鐘籠の、
浦曲の秋も立つなりや、なほ
このあたりの文は諸曲・融の改作である。
是は東國方より出てたる備にて候、

我いまだ都を見ず候程に、此度思
ひ立ち都に上り候、ゆふべを重ね
朝毎のく宿の名礎も重なりて、
都に早く着きにけり(融大臣)

融に「是は東國方より出でたる備にて候、我
いまだ都を見ず候程に、此度思ひ立ち都に上
り候、……、夕べを重ね朝毎の、宿の名礎も
重なりて、都に早く着きにけり」。

融の大臣の君が鹽釜の浦を都に掘江
こく(曾根勝)

河原左大臣融の君が京の大條河原に邸を造
り、池を掘り水を湛、毎月朔水三十石許を
運び入れて、陸奥國鹽釜の浦の景を移し、海
人の鹽釜に煙を立てて慰んだと云ふ故事を引
いて「掘江漕ぐ」に畫きつづけたのである。
融大臣のこの故事は諸曲・融にも見えてゐる。
融(融)をも見よ。

また水中の遊魚は釣針と疑へり、雲
上の飛鳥は弓の影とも驚けり、一
輪も下らず萬水とても昇らね
ば(國性爺)

三日月は其形釣針の如く、また弓の如ければ、
遊魚は釣針かと疑うて怖れ、飛鳥は弓の影か
と見て驚く。月影は地に影を投ずれども、月
そのものは下るにあらず、水蒸氣は天に昇れ
ども、水そのものは昇るのではない。一
輪といひ萬水といふも一と萬とを對して一
文飾で、月と水のことである。融に「又
水中の遊魚は釣と疑ふ、雲上の飛鳥は弓の影
とも驚く、一輪も降らず萬水も昇らず」とあ
るに據つたのである。

見え渡る山は皆名所にてぞ候ら
ん、御教へ候へかし、……、
月の都に入り給ふ御粧ひこそめて
たけれ融大臣)

融に「見え渡りたる山は皆名所にてぞ
候らん、御教へ候へ、……、月の都に入り給
ふ粧ひ、あら名残惜しの面影や」とある文を
採削したのである。併せ見よ。

三日月の目の釣針(關八州)

融に「三日月の色に三日月の、影を舟にも響へ
たり、又水中の遊魚は釣針と疑ふ」。

持つや田子の棒 汲んで擔うて持つ
や田子の棒(今宮)

融に「砂を汲まん」と持つや田子の棒、東か
らげの沙衣」とある文句に據り、田子に擔桶
をいひかけたのである。

【難波】

千秋萬歳の千箱の玉 御門の門ばた
とさす音笑ふ音、奥は千秋萬歳の
ちばこの玉とぞ諺ひける(女夫池)

難波に「ちやましましに運ぶ御寶の、千秋萬歳の
千箱の玉を奉る」。

唐土人の褒め言葉、咲くや此花今は
とて(卯月紅葉)

「唐土人」は王仁をいうたのである。王仁が
仁徳天皇の聖徳を頌して「難波津に咲くやこ
の花多ごもり、今を春とて咲くやこの花」と
詠じたといふ。難波に、「今ぞ顔はす難波津
に、咲くやこの花と詠じつつ、位をすすめ申

せし百濟國の王仁なれや」。

【二度掛】

虎嘯けば風起る(國性爺) 龍吟す
れば雲起り、虎嘯けば風
起(小栗判官)

二度掛に「龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風と
なる」。「龍吟すれば云々」をも見よ。

龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風起
ぐ(小栗判官(國性爺後日))

二度掛に「龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風と
なる」。「易の文言に「雲從龍、風從虎」古
樂府に、「虎嘯谷風起、龍興雲霧浮。淮南子
に、「虎嘯而谷風至、龍興而景雲屬」。

【野守】

有難し慈悲萬行の春の花は、三笠の
山の白雲、五重唯識の紅葉葉は、
春日の里の唐錦、神のまにまに影
頼む(天智天皇)

野守に「有難や慈悲萬行の春の色、三笠の山
に長閑にて、五重唯識の秋の風、春日の里に
普つて、誠に響も直なるや、神のまにまに
行きかへり、運ぶ歩みも積る老の、樂行く御
影仰ぐなり(仰ぐなりは喜多派には頼むなり
とある)とあるに據つたのである」。

慈悲萬行とは春日明神の菩薩號である。奈良
名所八重櫻(延喜六年刊)卷五、春日四所明神
の條にも「異説に、春日の神初のは山上に有
て、姿詣のたよりあしきゆゑ、仁皇五十代恒

武天皇延暦二十三年に空海和尚今の所へ改めうつし、慈悲萬行大菩薩と號し奉る」と見え

五重唯識とは法相宗興福寺の根本教義をいうたものである。法相宗の根本教義は唯識中道の妙理を證せしめるにある。この妙理を觀するに、遺虛存實論、捨盡留純論、攝末歸本論、隱劣顯勝論、遣相證性論、以上の五重がある。

【放下僧】

歩を運ぶ神垣や、隔てぬ願頼まん、月のは浮雲の、種と心やなりぬらん(用文章)

放下僧によつたのである。

「地主の櫻はその條を見よ。」

面白の花の廊や、世界の色のうはも

り、出口には柳招いて、入り来る客の揚屋の騒ぎに、素いお客はちりぢり、西の洞院中の堂寺、ぞめかばぞめけ上りの下の、町中の町の家並可愛くかしの袴が身を食ひ、根引身請は金がはばする、口舌諸譯は幫問請込む、年増の妓は紋日に追はるる、禿は遣手を怖がる、げに誠中戸小宿でちよつきりちよつと、問夫を切らるる、乗換への

女郎の恨みの、夜夜を重ねて附け廻したる(女夫池)

放下僧に「面白の花の都や、筆に盡くとも及び、東には祇園清水、落ち来る瀧の音羽の風に、地主の櫻はちりぢり、西は法輪燈籠の御寺、廻らば廻れ水車の輪の、りせんせきの川波、川柳は水にもまるる、しだり柳は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる、都の牛は車に揉まるる、茶臼は挽木に揉まるる、げに誠忘れたり」と、こきりこは放下に揉まるる、こきりこは二つの竹の、世世を重ねて、うち治まりたる細代かな」とあるの作り替である。「西の洞院」中の堂寺も共に京都島原遊廓の町名。「問夫をきらるる」は「まがら」條を見よ。

面白の花の都や、筆に盡くとも盡きぜし、東には祇園清水落ち来る瀧の、音羽の風に地主の櫻はちりぢり、西は法輪燈籠の御寺、廻らば廻れ水車の輪の、井堰井堰の川波川柳は水に揉まるる、野邊の薄は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる、都の牛は挽木に揉まるる、茶臼は挽木に揉まるる、げにまこと忘れたりとよ、こきりこは放下に揉まるる、こきりこは二つの竹の、世世を重ねて打治まりたる御代かな(用文章)

「地主の櫻(江京の清水境内地主権理社のある所)、櫻の名所である。「法輪は西山の法輪寺。燈籠の御寺」は燈籠の清涼寺。「ふくら雀」は「こきりこ」放下はその條を見よ。「よ」とは節節に世世をかけたのである。この文は放下僧(喜多流)の文である。但「盡きせり」は「及ばせ」となり、「野邊の薄は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる」は「ふくら雀は竹に揉まるる、野邊の薄は風に揉まるる」となつてゐる。

雀「こきりこ」放下はその條を見よ。「よ」とは節節に世世をかけたのである。この文は放下僧(喜多流)の文である。但「盡きせり」は「及ばせ」となり、「野邊の薄は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる」は「ふくら雀は竹に揉まるる、野邊の薄は風に揉まるる」となつてゐる。

茶道は挽木にもまるる、實にまこと忘れたりとよ門の盛砂、小者は筆にもまるる(胥庚甲)

放下僧に「茶臼は挽木にもまるる、實にまこと忘れたりとよ、こきりこは放下にもまるる」とあるの作り替へたのである。

法輪燈籠の御寺、まはらはまはれ水車の輪の、りせんせきの川波、川柳は水に揉まるる、しだり柳は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる、都の牛はくるくる車に、茶臼は挽木に揉まるる(兼好)

「ほふりん」まがらのおてら(以上地)「りせんせき」「ふくら雀」各條を見よ。放下僧に「西は法輪燈籠の御寺、廻らば廻れ水車の輪の、りせんせきの川波、川柳は水に揉まるる、しだり柳は風に揉まるる、ふくら雀は竹に揉まるる、都の牛は車に揉まるる、茶臼は挽木に揉まるる」

石。燈籠に臨川寺とて有、夢窓國師の開基なり、此所水石の景象他に勝れたり、今臨川寺の前に石塚あり、臨川石塚といふを略してりせんせきとはいひなり、あせきといふは山川にくひを打て石を積重ね水をせきといふなり。「ほふりんまがらのおてら」を見よ。

【白樂天】

青きが原の涙間より顯はれ出てし(天宮天皇)(加増賢我)

白樂天に「青き衣を帯びて駝の肩にかかり、花月がはらの波間よりあらはれ出てし此伴、浮名はばつと高砂の尾上かねも皆になり(大織冠)

白樂天に「青きが原の波間より顯はれ出てし住吉の神」とあるの作り替である。「高砂の尾上云々」はその條を見よ。

昔衣着たる巖はさもなくて、衣着ぬ山の帯をするかな(國性禪)

雲帯に似て山の腰をめぐる(國性語)

このあたりの文は白樂天に據つたものである。江談抄・卷四、都在中の詩に「白雲似帯圍山腰、青苔如衣負巖肩、年年別思驚秋雁、夜夜幽聲到曉鐘」。

東海の波路遙に行く舟の、跡に入り日の影残る、雲の旗手の天つ空、月又出づるそなたより、山見えそめて程もなく、蝦夷が千島に着きにけり(源義経)

白樂天に「東海の波路遙に行く舟の、跡に入り日の影残る、雲の旗手の天つ空、月又出づる其方より、山見えそめて程もなく、日本内地にも着きにけり」。

西の海青きが原の波間より顯はれ出てし住吉の神(加増曾我)

白樂天の文である。「山影のうつるか云々」を見よ。續古今集・第七・神祇部の歌に「西の海やあきか原の沙路より、顯はれ出でてし住吉の神」。

山影のうつるか水も青き海の、…鹿島三島諏訪(加増曾我)

白樂天にある文である。速に浦の波立ち歸り給

〔樂天〕唐の白樂天をいふ。この文は、唐の詩人白樂天が我國に渡らうとした際、住吉明神現じ給うて白樂天を逐返したことを作れる謡曲「白樂天中の文である。「山影のうつるか水も云々」を見よ。

【羽衣】

天の羽衣まれに來て、撫づとも盡きぬ大石の(釋迦)

天の羽衣の柔いものでたまま來て撫でも、更に盡きる期なき大石のといふ意。與儀抄に「經曰、四十里四方の岩を三年に一度梵天より下りて、三鉢の衣にて撫てつくしたるを一劫といへり」。羽衣に「君が代はあまの羽衣まれに來て、撫づとも盡きぬ巖ぞ」と。拾遺集卷五、賀の部、題知らず、み人しむずの歌に「君が代は天の羽衣まれに來て、撫づとも盡きぬ巖ならなむ」。

たまかつら かの天人の憂き思ひ、羽なき鳥の如くにて、天上せんにも羽衣なし、地にまた住めば下界なり、とやせんかくや詮方も、涙の露のたまかつら、かざしの花もしなした(抱狩)

〔玉鬘〕玉を飾つた鬘。「涙の露のたまかつらは、涙の露の玉に玉鬘をいひかけたのである。この文は羽衣に「今はまきながら天人も羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界なり」とやあらんかやあらんと悲しめど、はくれう衣を返さねば、力及ばず詮方も涙の露の玉かつら、かざしの花もしなした」とあるに據つたのである。

なうなう其太刀な取り給ひそ、それはいはれの候ぞや(抱狩)

抱狩御本地のこの後の文にも羽衣から出た所が多い。

撫づとも盡きぬさざれ石 七度返す小忌衣、撫づとも盡きぬさざれ石、巖となりて松高き、今に傳ふる源氏の御代(津戸三郎)

衣で石を撫でも撫でも永劫盡きることがないといふ故事で、萬代を祝ふ詞である。璽路經に「譬如二里石乃至十里石、方正尋以淨居三鉢衣、三年一拂盡此石、名二劫一撫」。羽衣に「君が代は天の羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬ巖ぞ」と、聞かも妙なり東歌の三保の松原に天の羽衣盗まれし彼の天人の憂き思ひ(抱狩)

三保の松原で天女が漁夫に羽衣を奪はれて悲んだことが羽衣に見えてゐる。抱狩御本地のこのあたりの文は羽衣に據つたのである。

ああ降つたる雪かな、いかに世にある人のさぞ面白う見給ふらん…あら面白からずの雪の日や(最明寺殿)

世にある人とは、世に用ひられて時めける人なり。

この文は、鉢の木を引用したのである。上野や佐野の船橋取放れし(最明寺殿)

船橋は、船を繋ぎ上に板を並べて架した橋、船橋は取放されるにより、「取放れし」の序に用いたのである。萬葉集・卷十四、「かみつけ

ぬ佐野の舟橋取放し、おやはさくれればさかればへ。このあたりの文は鉢の木に據つたのである、併せて見よ。

くばう 自然鎌倉に御上りあらばお尋れあれ、甲斐甲斐しくはなけれど公方の縁になり申さん(最明寺殿)

〔公方〕公家の方といふを略した語で、古くは朝廷をいうたのが轉じて將軍家の別稱となつた。源家の權勢弱なにつれて、鎌倉武士は北條氏を尊び儲けて公方と稱した。太平記鹽飽入道自害の條に「されば御邊は未承の管轄にて公方の御恩をも蒙らねば」とあるは、北條家を指して公方といふたのである。下りて足利義詮以後になつては將軍を公方様と稱するのである。鉢の木に「自然鎌倉に御上りあらばお尋れあれ、けうがる法師なり、かひがひしくはなけれども公方の縁になり申さん」。

こしかた 行方定めぬ道なれば、こしかたも何處ならまし(最明寺殿)

普通には過ぎ來し方の義なれども、ここの文はこれからこして行くべき先の道を云うたのである。鉢の木に「行方定めぬ道なれば、こしかたも何處ならまし」。

駒とめて袖うち拂ふ薩もなし、佐野のわたりの雪の夕暮(最明寺殿)

このあたりの文は鉢の木の作替へたものである。新古今集・卷三、に「百首歌幸りし時、藤原定家朝臣」としてこの歌が載つてゐる。佐野の舟橋 かみつつけや佐野の舟橋とりはなれし本領に安堵して歸る

ぞ嬉しかりける(最明寺殿)

佐野では舟を繋いで上に板を敷き並べて橋にしたがある、この橋はいつにても取離されるにより、「取離れし」の序に置いたのである、今まで我手を離れて他人の領地となつてゐたのを云ふ。このあたりの文は鉢の木に據つたのである、鉢の木の文と併せ見よ。

*しやもん、これは一所不住の沙門にて候(最明寺殿)

〔沙門〕梵語(Samant)である、勅息と譯す、善を勤め惡を思ふる義である。出家して佛道を修める者の稱である。阿含經に、「捨離塵愛、出家修道、持戒、不淫、外欲、慈心一切無所二傷害、遇二難不折、運苦不感、能忍如地、故號沙門」。鉢木に「これは一所不住の沙門にて候」、なほこのあたりの文は、鉢木に據つたものである。

*すのこ 今日の大雪前へも後へも参り難し、簀子の端にただ一夜頼みます(最明寺殿)

〔簀子〕すがで造れる藪。この文は、鉢の木に「餘りの大雪に前後を念じて候ほどに、一夜の宿を伺かし候」とあるを作りかへたのである。

だいがみ 粟の飯とは日本一のだいがみ、御馳走に預りたし(最明寺殿)

指添抜いて鬻四五寸ずつと切つて口に入れ、だいがみことほめ給へば(酒吞童子枕言葉)

〔雀肉味〕酪を精製したものを蘇といひ、蘇を精製したものを蘇蘇といひ、蘇蘇を更に精製

したものを醗醗と云ふ、以て飯上の味の意に云ふ。但言集覽に「醗醗味、大王膳とも云、牛酪にて製したる極上の酪を醗醗と云ふ」。

〔醗醗醗醗〕とあるは醗醗味醗醗味の略である。最明寺殿百人上臈のこのあたりの文は、鉢の木を作りかへたものである、併せて見よ。

*たじやうのえん、私も其下にて暫しが程の雨やどり、こなさんも其通り、其雨どひを一樹の陰、他生の縁でござんす(生玉)

〔他生縁〕この世ならぬ因縁の義、幾多生死の間に結んだ因縁を云ふ。譬に、袖振合ふも他生の縁と云ふ。鉢の木に「假初ながら值遇の縁、一樹の蔭のやどりも此世ならぬ契なり、それは雨の木蔭。説法明眼論に、「宿一樹下、汲二河流、一夜同宿、一日夫妻、……皆是先世結縁」。

ただ頼め我世の中にあらん限は(最明寺殿)

このあたりの文は鉢の木に據つたのである、併せて見よ。新古今集巻二十に、「清水親世昔の御歌となむひ俵へたる」と詞書ありて、「なほ頼めしめちが原のさしもさ、われ世の中にあらんかぎりは」。

*はやちもち 今度の早打に上り集る兵(最明寺殿)

〔早打〕上の命令を傳へる早飛脚。このあたりの文は鉢の木に據つたのである。

ほそぬのごろも 袂も朽ちて袖袂き細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせん(最明寺殿)

狭布の里(今陸中國鹿角郡の)から産出する袖狭き布衣を着て、寒さに堪へるあまじさをどうしたらよき事であらうの意、狭布に今日をいひかけたのである。このあたりの文は鉢の木に據つたものである。

*ほんりやう まづまづ沙汰の始めには、常世が本領佐野の莊三十餘郷返し與ふところなり(最明寺殿)

〔本領〕鎌倉時代開發した私領、即ち古くから持ち傳へた領地。本知、舊封。沙汰未練書に、「本領者爲三開發領主、給て代武家御下文、所領田畠等事也」。最明寺殿百人上臈のこのあたりの文は鉢の木に據つたのである。

松はもとより畑にて(最明寺殿)

松は花粉風に吹かれて畑のやうに見えて散亂するところなり。或はまた松は脂多くして新松明などに用ひ、燃え易き木なる故にかくいふともいふ。このあたりの文は鉢の木に據つたのである。

窓の梅の北面は雪封じて寒きにも(最明寺殿)

北方は日陰だにこつて雪消えず、窓前の梅樹も雪に封じられて春暖を覺えない。和漢別詠集春部、藤原茂茂の時に「池凍東風度解、窓梅北面雪封寒」。このあたりの文は鉢の木に據つたものである。

見じといふ人こそ憂けれ山里の折かけ垣の梅(最明寺殿)

山里の鷓鴣に枝折り曲げて作つた垣の中に、梅花あらは美しいによつて立とどまつて眺めたいものだ、それを見まいとする人こそ風流心の無い癡い人だの意。菅家後集に「山

里の折かけ垣の梅の花、いかなる人の見じとふらむ。最明寺殿百人上臈のこのあたり

の文は、鉢の木に據つたのである。

雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、人は鷺鷺を被て立つて徘徊す(最明寺殿)

〔鷺毛〕は鷺鳥の羽毛である。〔鷺鷺〕は鷺の羽毛を織込んだ衣である。鷺は字典に、「鷺折羽爲裘衣之屬」とある。最明寺殿百人上臈のこのあたりの文は鉢の木に據つたものである。白氏文集に「雪似鷺毛飛散亂人被鷺鷺立徘徊」。

行方定めぬ道なれば来し方も何處ならまし、これは一所不住の沙門にて候、我この程は信濃國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづ此度は鎌倉に上り坐禪に籠り、春になり修行に出てばやと思ひ候(最明寺殿)

〔来し方〕はこれからして行くべき先先の道といふ。「一所不住の沙門」とは、所定めず行雲流水を友として諸國を遍歴する僧をいふ。「沙門」はその條を見よ。最明寺殿百人上臈のこの文は鉢の木に據つたのである。但し「坐禪に籠り」は附加へられたものである。

*われ世の中にあらん限はただ頼め 餘の佛菩薩千體に勝り給ふ千手の誓、我世の中にあらん限はただ頼めとの御誓願(井筒)

新古今集巻二十に、「清水親世昔の御歌となむひ俵へたる」と詞書ありて「なほ頼めしめちが原のさしも草、われ世の中にあらん限

りは、とある歌を録木に引用して、「ただ頼め
我世の中にあらんほど」としてある。集林予
もこれに據つたのである。一首の意は、天下
の民草は我が世の中にあらず限は深く我を頼
みにせよ、必ず成佛を待たせよであらうとの意。
井筒業平河内通のこの文に「下手の響とあ
るは、清水寺の観世音は千手世音なればし
かいたのである。雍州府志・寺院門上愛宕
郡に、「清水寺。寶龜十一年坂上田村九草三
御伽堂、安藤八尺千手觀音」と見えてゐる。

芭蕉

風吹きしのが忍草、しのぶとすれど
古への、花はあらしの頃に、今日
の寒さをくひしはる(夕戀)

芭蕉に、「身は古寺の軒の草、忍ぶとすれど古
へも、花はあらしの春にのみ、芭蕉葉の云云」
芭蕉に落ちて松の聲、痛はしとや思
しけん、姫君我を忘れつつ、芭蕉
に落ちて松の聲、あらおいとしや
と宣(伊豆日記)

芭蕉に、「芭蕉に落ちて松の聲、あだにや風の
破るらむ」とあるに據つたのである。松を吹
き渡る風芭蕉を吹散して徒に其葉を破るを、
頼朝の身の上に引合せ同情してかくいうたの
である。

芭蕉葉の夢

「よしや思へば定めなき云云」を見よ。
恥かしや故郷の道もさやかに照る月
の影はさながら庭の面、よしなき

芭蕉の憐れる姿見えし上からはう
かうか戻る所てなし(伊豆日記)

芭蕉に、「恥かしや歸るさの道さやかに照る
月の、影はさながら庭の面の雪の中の、芭蕉
の憐れる姿の誠を見れば如何ならんと思へば
鐘の聲」。

水に近き樓臺はまづ月を得るなり、

…置き所なき身の果や(伊豆日記)

芭蕉に出てゐる文である。但し芭蕉にこの末
文「置き所なき蟲の音の」となつてゐる。事
文別集・蘭麝門、蘇麟の詩に、「近く水樹邊先得
月、向陽花木易爲香」。水邊の樹邊は月影
早く見られ、暗面なる木は花早く開けて香と
なり易いとの意である。

夢現とも分かざるに、女性の月に見
え給ふは如何なる人にてまします
ぞ(伊豆日記)

芭蕉にある文である。但し芭蕉には「女性には
「女人」となつてゐる。

よしや思へば定めなき世は芭蕉葉の
夢の中に、牡鹿の鳴く音は聞きな
がら驚きあへぬ人心、思ひいるさ
の山はあれど(伊豆日記)

芭蕉に出てゐる文である。とても轉變無常の
この世はさながら芭蕉葉の夢の如くで、秋に
鳴く牡鹿の音の哀れなるを聞きながら、無常
無常を悟らねば散て驚きもせず、執着の念に
とらはれるものもあれどこの意。「芭蕉葉の夢」
は列子に出てゐる故事である。列子・陳玉篇
に、「鄭人有新手足野者、遇駭鹿而驚、
之、恐二人見之也、藏之、語陰中覆之以蕉、

俄而失其處、遂以爲夢、順途而語其事、
傍有聞者取之、告室人曰、新者夢得
鹿不知其處、吾今得之、彼直眞夢者矣」。
「思ひいるさの山」とは、思入るに分るる山を
いひかけたので、古歌の句である。金葉集・卷
七、戀上部の歌に、「こひわびて思ひいるさの
山のはに、出づる月日の積りぬるかな」。

班女

秋よりさきに必ずと、夕の数はかさ
なれど、來ぬ夜つもりりの恨めし
や(女楠)

秋の來ぬ以前に必ずお訪ねすると語らうと別
れたに、その後幾多の日を経過すれども、遂
に訪ひ來る夜なく恨めしいわいの意。班女
に、「秋より先に必ずと、ゆふべの歌は重れ
ど、あだし言葉の人心」。

うたてやなあれ御覽ぜよ、うたてや
なあれ御覽ぜよ、今まではゆるが
ぬ梢と見えつれども、風の誘へば
こそ一葉も散るなり、たまたま心
すぐなるを、狂へ狂へと笑ふ人こ
そ、風狂じたる秋の葉の、心もと
もに亂れ戀の(西玉母) うたてやな

これ御覽ぜよ、今までは揺がす折つ
てかたげし此柳、風の誘へばこそ
一葉も散るなれ、たまたま心すぐ
なるを、戀こそ我をくる狂はず
れ、風狂じたる秋の葉の(女楠)
班女に、「うたてやなあれ御覽ぜよ、今までは

ゆるがぬ梢と見えつれども、風のさそへば一
葉も散るなり、たまたま心すぐなるを、狂へ
と仰せある人こそ、風狂じたる秋の葉の、
心も共に亂れ戀の」。

鳥

けいろうのやま、逢初めし夜のむつ
ごとも語りつくさぬ鐘のこゑ、け
いろうの山に響きて森の小鳥八こ
ゑの鳥(女楠)

「雜韻山曉の山の意。本朝文粹・八に、「雜韻
之山欲曉」見えて、雜韻は欲曉の語から
出たのである。班女に、「さびしき夜半の鐘の
音、雜韻の山に響きつつ、明けんとして別
れを催し」。

翠帳紅閨に枕並べし閨の内、馴れし
ふすまの夜すがらも、四つ門の跡
夢もなし、さるにても我夫の、秋
より先に必ずと、あだし情の世を
頼み(冥途飛脚)

「翠帳紅閨は、翠の帳を掛け紅のしきね
を敷いた美麗な閨をいふ。四つ門はその條
を見よ。落葉集・題後、松の落葉、元祿十七年
刊卷二、稻荷坂四つ門の唄に、「翠帳紅閨に
枕並ぶる床の内、馴れしなまきの夜すがら
も、四つ門の跡夢もなし、さるにても我つま
の、秋より先に必ずと、あだし言葉の人心、
…」。班女に、「翠帳紅閨に枕並ぶる床の上、
馴れしふすまの夜すがらも、同穴のあと夢も
なし」。

そなたこそ狂人よ、我は固より氣
違の零さぬ水のあはれを知ら
ば(女楠)

班女に「たまたま心ずぐなるを、狂へと仰せある人々こそ、風狂じたる秋の葉の」とある文の換骨奪胎である。「氣運の零さぬ水」とは、氣運とてもたまたま心ずぐなることある意の謎である。なほこの文に「なるはれ」とあるは、泡に哀れをいひかけたのである。

楚王宮裏の柳の眉 病も自ら誠の病と御所住居、楚王宮裏の柳の眉、浮かぬ目元の重たきも隠して少し打笑ひ(本領曾我)

楚王宮裏とは、楚の襄王が宋玉と共に遊んだといふ雲夢の臺を云ふ。柳の眉とは、柳葉のやうに細い美女の眉をいふ。和漢朗詠集・冬部のに、「楚王臺上夜零露」。班女に、「楚王の臺の上には夜の露の聲」。この文は、平宗盛の御所に於ける熊野の美貌を形容してかきうたのである。

だんせつつの扇雪なれど、消えても礎る世の中に(百日曾我)

班女に、「團雪の扇も雪なれば、名をまくもすましくて」。本朝文粹・大江匡衡の對三水石詩序に、「班婕妤團雪之扇代三承風含長志云云。

閨の扇は班女が親骨にせかれ(歌急佛)
美濃國野上宿の長姉花子が吉田少將と契つた。少將扇を取替へて東に下つた。花子は少將を慕ふ餘り取替へた扇を降入りて、開き外へ出なかつたので長怒つて花子を追出した。花子遂に狂女となつて班女と呼ばれたことが謡曲・班女に見えてゐる。この文はそれに換つたのである。

我が夫の雲井を出てしは卯月の空、

秋より先に必らずと、夕の数は重なれど、來ぬ夜積りの恨めしや(女備)

班女に、「我が夫の秋より先に必らずと、夕のかすは重なれど、あだし言鶴の人心、頼めて來ぬ夜はつれもれども」。秋より先に云々を見よ

【檜垣】

風縁野に收まつて煙條直し、雲岸頭
に定まつて月桂園かなり(三世相)

「煙條は揚柳の露み渡れること。月桂は月のこと。楨垣に「あら有難の巾ひやな、風縁野に收まつて煙條直し、雲岸頭に定まつて月桂園かなり」。

貧しき家には故人疎く(會稽山)
家貧乏なときは故舊の人も訪はねば疎遠となる。本朝文粹、播在列詩に、「家貧親知少、身疎故人疎」。楨垣に、「貧家には親知少、賤しきは故人疎し」。

【百 萬】

げにや世世ごとの親子の道、憂き身一つに限らねど、子故の闇の晴れやらぬ、暗きうき世の暗きより、暗きに迷ふ三界の、なほ首伽とひく舟を(十二段)

百萬に、「げにや世世ごとの、親子の道にまとはりて、なほ子の闇を晴れやらぬ、朧月の薄曇、僅に澄める世になほ三界の首伽や」。

三界の首伽 河津殿ましまさげかほどにはあるまじき、母の親とて侮づるか、子は三界の首伽よ、恨し心やと(大鵬虎)

子は現世の手足まといふ意、欲界・色界・無色界の三界は何れも有漏の迷界なれば娑婆即ち現世の義に依ふ。「首伽」は罪人の首をしにまとはりて、なほ子の闇を晴れやらぬ、朧月の薄曇り、わづかに澄める世に、なほ三界の首伽や。

***なまうた** 雲晴れれども西、西へこそ行け、なまうたなまうた(貧古教僧)

南無阿彌陀佛の詠略。百萬に、「彌陀頼む、人は雨夜の月なれや、雲晴れれども西へ行く、あみだぶやなまうた」。

***ならざかや** 今ば名の上に奈良坂や、この手の手の枕の酒(反魂香)

楢の葉が兒の手に似てあるより、楢を奈良坂にひひなして「奈良坂やこの手」といひ續けた例は昔にも多い。萬葉集卷十六、謗二候八歌に、「奈良山のこのてがしはの云云」。百萬に、「奈良坂やこのてがしはのふた面」。

轆けや轆けや此車 姿を物に狂はせて、轆けや轆けや此車えいさらさらさら(反魂香) ひげやひげやこの車、ひくや佛の御手の絲(小栗判官)

百萬に、「亂れ心か藤草の力車に七車、積むとも盡きおそくとも、轆けやえいさらえいさと、……轆けや轆けや此車」。

*びしゆかつま いかにも嵯峨の釋迦、毘首羯磨の御作というてもだんないと(生玉)

〔毘首羯磨〕梵語(Vishakraman)で、印度美術の神名である。「毘首羯磨の御作」とは、天竺佛工の御作の意。この文は百萬に、「嵯峨野の寺に寄りつ、……毘首羯磨が作りし赤檜橋の尊容」とあるを應用した洒落である。但しこの洒落は新増大坑波集に既に見えてゐる。「さがのしやか」しやくせんだんを免ふ。

人は雨夜の星なれや 人は雨夜の星なれや、雲晴れれども西へ行く(開八州) 人は雨夜の月星なれや、雲晴れれども西、西へこそ行け、なまうたなまうた(貧古教僧)

類偈に迷ふ身でありながら、彌陀の佛力によつて西方極樂世界に廻かれるを、雨夜の星が雲に隠れながら西へ行くに譬へたのである。百萬に、「南無阿彌陀佛みだ頼む、人は雨夜の月なれや、雲晴れれども西へ行く、あみだぶやなまうた」。

彌陀頼む、彌陀の誓を頼む身の、人は雨夜の星なれや、雲晴れれども西へ行く(開八州)

百萬に、「彌陀頼む、人は雨夜の月なれや、雲晴れれども西へゆく」。

【富士太鼓】
持ちたる柳を剣と定め云云(女備)

富士太鼓にある「持ちたる撥をは船と定め云云」の改作である。「そも修羅の敵は誰ぞ、大森蒼七云云」を見よ。

【三人静】

花を踏んで同じく惜しむ色もあり(國性齋)

二人静に、「花を踏んで同じく惜しむ少年の」と見えてゐる。和漢朗詠集卷部、白居易の「春夜の詩句に「踏花同惜少年春」。

見渡せば松の葉白き石橋山、幾世凍りし雪ならん(冷泉節)

二人静に、「見渡せば松の葉白き吉野山、幾世積りし雪ならん」とあるを作かへたのである。

【藤戸】

憂しや思ひ出てし、忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思なれざるにても身はあだ波の定めなくとも、科によるべの水にこそ、濁る心の罪あらば、重き罪科もあるべきに、よしなかりける海路のしるべ、思へば三途の瀬踏なり(佐佐木)

藤戸に見えてゐる文である。科によるべの水云云」はその條を見よ。

佐佐木が藤戸の浦人を殺せしも深き軍法(女夫池)

佐佐木三郎盛綱が備前國児島に平家を攻めたる時、藤戸の浦の漁夫に海の淺瀬を案内させ

た、さて下郎は筋なき者にて又もや人に語るだらうと思ひ、その思になつた漁夫を刺殺した。詳しくは藤戸にも見えてゐる。

【月頭には東にあり】

月頭には東にあり、寄来る波のわかれこそ、川瀬のやうに淺くして、月頭には東にあり、月の末には西にありありありそ海佐佐木

月頭は月の初をいふ。川瀬のやうに淺い處が月の初には東にあり、月末には西にある。藤戸に「川瀬のやうなる所の候、月頭には東にあり、月の末には西にあると申す」。

科によるべの水にこそ、濁る心の罪あらば、重き罪科もあるべきに(佐佐木)

「上るべ」は縁の意。無心の水は正邪を正直に映すやうに、公明な裁判によつて若し邪心あつて罪科を犯してゐるならば、その縁由によつて重罪に處せられても然るべきであるのに

【船辨慶】

悪風吹掛け眼もくらみ、前後を忘するばかりなり(谷庚申)

船辨慶に「悪風を吹きかけ、眼もくらみ、心も亂れて、前後を忘するばかりなり」とあるを引用し、口中の臭氣に利かせたのである。

あらめづらや、いかにか義經、思ひもよらぬ浦浪の、…眼もくらみ心も亂れて、前後を忘するばかりなり(西王母)

船辨慶に出てゐる文である。思ひぞ出づる浦波の、聲をさるるべに出船の、知盛が沈みしその有様を知らずや(藤野)

【思ひぞ出づる浦波の】

思ひぞ出づる浦波の、聲をさるるべに出船の、知盛が沈みしその有様を知らずや(藤野)

思ひぞ出づる浦波の、聲をさるるべに出船の、知盛が沈みしその有様に、眼もくらみ心も亂れて、前後を忘するばかりなり(吉岡榮)

船辨慶に「思ひもさるる浦波の、聲をさるるべに出船の、知盛が沈みし其有様に、…眼もくらみ心も亂れて、前後を忘するばかりなり」。

桓武天皇無體の後胤、忝くも桓武天皇無體の後胤、攝州津の國服部の住人葉屋の彦介(齋門松)

【住人葉屋の彦介(齋門松)】

葉屋彦介は桓武天皇とは縁のあらう筈がなからぬ、故に無體の後胤である。この文は船辨慶に「抑是は桓武天皇九代の後胤平の知盛幽靈なり」とあるを作替へたもので、知盛の幽霊が義經を目掛けて怨恨を晴さんとすのと、彦介が吾妻を捕へて暴力に及ばうとするのと、何となら似通うこの一句に妙味を覺える。

立舞ふべくもあらぬ身の、立舞ふべくもあらぬ身の、名もいとましき舞樂の前(吉岡榮)

船辨慶に「立舞ふべくもあらぬ身の、袖うちふるも恥かしや」。

傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種種の智略をめぐらし、終に呉を滅して勾踐の本意を達すとかや(國性齋)

陶朱公は支那春秋戰國時代の越國の忠臣范蠡のことである。勾踐は范蠡が臣事した越國の王である。「會稽の恥辱を雪ぐを見よ」。船辨慶に「傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種種の智略をめぐらし、終に呉王を滅して勾踐の本意を達すとかや」。

知盛が沈みしその有様に…、船辨慶にあらねども…」を見よ。

ともあなみのもの「あらめづらしやかに義經……」を見よ。

☆ひら 大門口の與右衛門の門番には二代の後胤、平の供して口輕く(反魂香)

「平」名古屋山三春平の手を取つていうた替名、「なかば」の條を併せ見よ。「二代の後胤平の供」は船辨慶に「桓武天皇九代の後胤平の知盛」とあるを引用した輕妙の筆である。

【船辨慶にあらねども】

其有様に…(今宮)

船辨慶に「知盛が沈みし其有様に、又義經をも海に沈めんと、夕浪に浮べる長刀執直し、巴浪の紋あたりを拂ひ潮を顧立て、悪風を吹きかけ眼もくらみ、心も亂れて前後を忘するばかりなり」。

船辨慶に「立舞ふべくもあらぬ身の、袖うちふるも恥かしや」。

傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種種の智略をめぐらし、終に呉を滅して勾踐の本意を達すとかや(國性齋)

【陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種種の智略をめぐらし、終に呉を滅して勾踐の本意を達すとかや(國性齋)】

陶朱公は支那春秋戰國時代の越國の忠臣范蠡のことである。勾踐は范蠡が臣事した越國の王である。「會稽の恥辱を雪ぐを見よ」。船辨慶に「傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種種の智略をめぐらし、終に呉王を滅して勾踐の本意を達すとかや」。

知盛が沈みしその有様に…、船辨慶にあらねども…」を見よ。

ともあなみのもの「あらめづらしやかに義經……」を見よ。

☆ひら 大門口の與右衛門の門番には二代の後胤、平の供して口輕く(反魂香)

「平」名古屋山三春平の手を取つていうた替名、「なかば」の條を併せ見よ。「二代の後胤平の供」は船辨慶に「桓武天皇九代の後胤平の知盛」とあるを引用した輕妙の筆である。

船辨慶に「知盛が沈みし其有様に、又義經をも海に沈めんと、夕浪に浮べる長刀執直し、巴浪の紋あたりを拂ひ潮を顧立て、悪風を吹きかけ眼もくらみ、心も亂れて前後を忘するばかりなり」。

船辨慶に「立舞ふべくもあらぬ身の、袖うちふるも恥かしや」。

傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種種の智略をめぐらし、終に呉を滅して勾踐の本意を達すとかや(國性齋)

辨慶が武器で對つては叶けないとて、歌珠を揉んで五大尊を罰請して祈禱したのである。五大尊は眞言密教の立つる神で何れも忿怒破邪の形相を備へてゐられる。船辨慶に「辨慶おし隔て、打物わざにて叶ふまじと歌珠さらさらと押揉んで、東方降三世、南方軍荼利夜叉、西方大威徳、北方金剛夜叉明王、中央大聖不動明王」。

辨慶搗婦

辨慶搗婦がいそがしき、口舌の中を押隔て、打物わざにて叶ふまじと日に幾度のわび言やら(反魂巻)

船辨慶に、義經主従大物の浦より出船の後、平知盛の幽霊に遇はれ、辨慶が義經を保護しつつ五大尊を祈つて幽霊を追拂つた意蘊な動作を記してある。搗婦(その條)みやが妓女と遊客の間を取扱ふ忙しさを、辨慶のその動作に準據して辨慶搗婦と洒落たのである。二この文に「辨慶、押隔て打物わざにて叶ふまじ」とあるは、謡曲・船辨慶の文を引用したのである。(前條を見よ)。

松風

あきかぜ越ゆるは須磨の關(酒吞童子)

松風に「心づくしの秋風は、海は少し遅けれども、彼の行平の中納言、開吹き越ゆると詠め給ふ。薄古今集に、「旅人の袂すすしくなりにけり、開吹き越ゆる須磨の浦風」源氏物語須磨の巻に、「心づくしの秋風は、海は少し遅けれど、行平の中納言の開吹き越ゆるといひけん浦波」。

あら頼もしの御歌や、…いざ立寄りて、磯馴松のなつかしや、松に吹き来る風も狂じて(堀川波鼓) 松風にある文である。「磯馴松」とは枝幹地に傾きて生ひ茂つた松。

かたみこそ今はあだなれ 形見こそ今は仇なれ松風(生玉) 形見こそ今は仇なれ、これなくば忘るるひまもありなんと、詠みしも理りや、なほ思ひこそ深けれ(堀川波鼓)

戀しい人の殘し置いたその形見が、今は却つて我が爲にかたきだ。若しもこの形見がなかつたならば、少しは忘れる時もあるであらうものを、この形見があるによつて見ては昔を思出して、忘れることができないとの心を古人が歌に詠んだのも道理だわい。形見の爲に慕ひ悲しむ情が一層深いとの意。古今集戀四部に「かたみこそ今は仇なれこれなくば、忘るる時もあらまじものを」と、この文は松風に出てゐる文である。

形見の烏帽子 見ぬ顔したるつらい男め、形見の烏帽子狩衣を出して恥をかかせうか、いやいや包む間は頼みあり(松風) 形見の烏帽子は行平の言被り(歌念佛)

謡曲松風に、中納言在原行平が松風・村雨の二女と契り、形見に烏帽子狩衣を譲渡したのを、松風が眺めては戀念びることを記してある。それを果林子は、行平が忘れない爲にと置いた形見は實はそれにかこつけて、二女に情が薄らいで御免を蒙つたことにしたのである。

これを見るたびにいやましの思ひくさ、葉末に結ぶ露の間も、忘られはこそあぢきなや、形見こそ今はあだなれこれ無くば、忘るる際もありなんと(酒吞童子)

この文は松風に出てゐる。この形見がある爲に行平を思ふ情は益つる片時も忘れられない、まてこの形見無益ぢやわい、いつそ我を苦しめる仇ぢや、若しも形見が無かつたならば、思出すこともなく少しは忘れる時もあるらうものを念との意。

扱も行平三年が程、御徒然の御舟遊、月に心は須磨の浦、夜汐を運ぶ海人少女に、妹姉選はれ参らせつつ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴るる須磨の海人の、鹽焼衣色かへて、練の衣の空嬢なり(堀川波鼓)

松風に見えてゐる文である。汐汲車わづかなる浮世を廻るはかさよ、心盡しの秋風に、海は少し遅けれども、開吹き越ゆると眺め給ふ、浦曲の波のよるよるは、實に吾近き海士の家、里離れるる通路の、月より外は友もなし(松風)

「汐汲車は汐を汲入れた桶を載す車。「わづか」には、僅に輪をひかけた。「心盡しは千々に物思ひすること。謡曲・松風に、「汐汲車わづかなる浮世に廻るはかさよ、波二二

もとや須磨の浦、月さへ濡す袂かな、心盡しの秋風は、海は少し遅けれども、彼行平の中納言、開吹き越ゆると詠め給ふ、浦曲の波の夜夜は、げに吾近き海士の家、里離れるる通路の、月より外は友もなし。源氏物語・須磨の巻に「須磨にはいと心盡しの秋風は、海は少し遅けれど、行平中納言の開吹き越ゆるといひけん浦波、夜夜はげにいと近く聞えて、またなくあはれるもののはかかる所の秋なりけり」。

しほやきごろも 月にも馴るる須磨の海人の、鹽焼衣色かへて(堀川波鼓)

「鹽焼衣」鹽焼く海人の着る衣。このあたりは松風にある。「扱も行平云云」を見よ。

捨てても置かれず、取れば面影に立ちまざる、起臥わかつて枕より、跡より戀の實め来れば(西王母)(酒吞童子) 松風に「捨てても置かれず、取れば面影に立ちまざる、起臥わかつて枕より、跡より戀の實め来れば、せんかた涙に伏し沈む事悲しき。須磨の高波はげしき夜半の、夢に取られたる潮の又、渡るも深き戀の道、傳はる國の御靈の、お供申し歸る波の、須磨の浦かけて吹くや後の山おろし、關路の鷄も聲に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きし今朝見れば、松風はかりや礎るらん(松風)

松風に、「須磨の高波はげしき夜すがら、妄観の夢に見ゆるなり、我跡留ひてたび給へ、眼

申して歸る波の音の、須磨の浦かけて吹くや
後の山おろし、關路の鶴も驚聲に、夢も跡な
く夜も明けて、村雨と聞きしも今願見れば、
松風ばかりや残るらむ」とあるを仔細かへた
のである。

關路の鳥 御代の關路の鳥も、この曉
を、今しげし忍べや我も忍ぶぞ
(雪女) 關路の鳥も聲聲に、夢も
跡なく夜も明けて、村雨と聞きし
も今朝見れば、松風ばかりや残る
らん(酒香童子)

支那春秋戰國の世齊の孟嘗君秦から逃げて夜
半に函谷關に至る。この關の捉に鶴鳴かぬ
中は關門を開けないので、孟嘗君困つた時幸
に孟嘗君の食客に鶴鳴の真似をよくする者が
あつて、近隣の鶴盡くそれに和して鳴いた
爲、乃ち無事に關を出ることが出来たと云ふ
故事によつたのである。この故事の委しいこ
とは史記について見よ。傾城酒香童子のこ
の文は松風にある文である。

關吹き越ゆる 關吹き越ゆる 秋の
風(國性斎) 海は少し遠げれども、
關吹き越ゆると眺め給ふ、浦曲の
波の夜夜は(松風) 關吹き越ゆると
詠じけん須磨の鹽屋(天神記)

續古今集・彌旅の部中納言行平の歌に「旅人
の袂すすしくなりけり、關吹き越ゆる須磨
の浦風」。源氏物語須磨の巻に「行平の中納
言の、關吹き越ゆるといひけん浦波よるよる
は」。松風村雨東帶鑿のこの文につきは、
「汐波軍備なる浮世に云云」を見よ。

***ぞなれまつ** 須磨の浦曲の松の行
平、立歸りこば我も小蔭にい
ざ立寄りて、ぞなれ松の懐し
や(堀川波鼓)

「そなれまつ」(須磨松)の「い」の脱略された
語である。この文は松風に據つたものであ
る。「あら頼もしの云云」を見よ。
そらだき かとりの衣のそらだきな
り(堀川波鼓)

(空懸)種種の薬劑を藥研で碎いて粉末とな
し、蜂蜜の類を加へて煉り九め、これを乾固
めたるのを細き煙の立昇る程の火に入れて煨
べ蒸じること。堀川波鼓のこの文は松風に
據つたものである。
**立別れ因幡の山の峰におふるまつと
しきかは今歸り來ん**(堀川波鼓)

我汝と別れ因幡の國に往くが、其國の稻葉山
に生ふる松の名のやうに、汝が我を待つと聞
かば直に歸り來うとの意。稻葉山は因幡國法
美郡にある。この歌は古今集離別部に中納
言行平の詠として出ている。但し堀川波鼓の
このあたりの文は松風に據つたのである。併
せ見よ。
**月は二つ影は二つ、みつ汐に寄來る
波の**(佐佐木)

「みつ」は滿つに三つをひかけ、「寄來る」の
よに四をひかけた文飾である。松風に「う
れしや是にも月あり、月は二つ影は二つ、み
つ汐の夜の車に月を載せて」とあるを應用し
たのである。
三瀬川絶えぬ涙の浮瀬にも、…憂

いと**も思はぬ假寐かなや**(松風)
謡曲松風に「三瀬川絶えぬ涙のうき瀬にも、
亂るる戀の淵はありけり、あらうれしやあれ
に行平の御立あるが松風と召されさむらふぞ
や、いで寄らう、あましましやその御心故にこ
そ執心の罪にも沈み給へ、後妻にての妄執を
なほ忘れ給はぬぞや、あは松にてこそ候
へ、行平は側入もさむらはぬものを、うたて
の人の言ひごとや、あの松こそは行平よ、た
と暫しは別れるとも、まつとし聞かば歸り
來んと連ね給ひし言の葉は如何に、實になら
忘れて候ぞや、たとひ暫しは別れるとも、待た
ば來んとこの言の葉をこなたは忘れず松風の、
立歸り來む御音信」、「人にや誰もつけの鶴、
さしくる汐を渡分けて見れば月こそ相にあ
れ、これにも月の入りたるや、うれしやこれ
も月あり、月は二つ影は二つみつ汐の、よる
の車に月を載せて、憂しとも思はぬ汐路かな
や」とあるに據つたのである。

**身にも及ばぬ戀をさへ、須磨のあま
りに罪深し**(酒香童子)

「須磨に」爲るをひかけ、「餘りに」海人
をひかけたのである。この文は松風に見え
てゐる。
**宵宵に脱ぎて我寐る狩衣かけてぞ頼
む同じ世に、住む甲斐あらばこそ
忘れ形見もよしなしと、捨てても
置かれず取るもねたまし腹立寐入
り**(吉岡染)

松風に出ている文である。但し「取るもねた
まし腹立寐入り」は、松風には「取れば面影
に立ち増り」となつてゐる。吉岡が憲法から
貰つた衣を取捨てはしたもののさのみにて

置かれず、さればとて取上げもねたましく
腹立ち寐入りの意に用ゐたのである。
**我も木蔭にいざ立寄りて 出来た出
來た殊に舞の内、我も木蔭にいざ
立寄りての思入れ、息がはずむ
と**(酒香童子)

松風に「須磨の浦の松の行平立歸りこば、
我も木蔭にいざ立寄りて須磨松のなつかし
や」。

【松山鏡】
**往時渺茫として夢に似たり、人生寂
然として泉に歸す、これを現とい
はんとすれば、武帝の漢女を慕ひ
し煙、幻と見れば、さうこうが淵
を求めし父の骸、皆一心によると
かや**(井筒)

「渺茫」ははるかな貌。「泉に歸す」は黄泉に歸
す、即ち死して地に入るをいふ。「武帝の漢
女を慕ひし煙」とは、漢武帝深く寵愛する李夫人
の死を悼み、反魂香を焚いたその煙の中に、
李夫人の姿が出現したといふ。松山鏡に「漢
の武帝の後李夫人なくならせ給ひて後、帝后
の御別れを悲しみ給ひ、御容を甘泉殿の壁に
寫し、明香敬愛ありしが、もとより繪に
畫ける形なれば、物言はず笑はず、なかなか
愁ひぞ増さる。……月の夜の闇なきに反魂
香を焚き給へば、煙の内に后の御姿まみえ給
ひしためしもあり」。同松山鏡に「往時渺茫
として都で夢に似たり、舊衣零落してなれば
泉に歸す、これを水といはんとすれば、即ち漢

女が粉を添ふる鏡清整たり。和漢朗詠集雜部、白居易の詩に「往時歌託都似夢、舊遊零落半歸泉」。さうこうが淵を求めし父の體をも見よ。この文の大意は、死したる者がありありと生前の姿を出現することがある、ある生死は何れが現で何れが幻か、要するに一心の作用によることとたとひの意。

【三輪】

歸る處を知らんとて、苧理に針をつけ、裳裾にこれを纏付けて跡を控へて暮ひ行く、まだ青柳の絲長く、結ぶや早玉の、おのが力にささがにの、絲くりかへし(傾城吉岡染)「早玉」ささがに「ほその條を見よ。この文は三輪に出である。

女姿と三輪の神 女姿と三輪の神、其をだまきを繰返し戀しき人のもすそに附けて(三世相) 三輪に「人心や女姿と三輪の神、千早掛帯ひきかへて」とあるに據つたのである。なほ三輪に、大和國に年久しく女の許に通ふ者がある、夜來て晝架ないので、女不審に思ひ夫の住家を知らうとして、苧環に針をつけ衣の裾に纏付けて、その跡をひかへ慕ひ行きければ、其絲の三わけ残つて山本の神垣杉の下枝に止つたことを記してある。

【三井寺】

初瀬も遠し難波寺、名所多き鐘の

壁、つきぬや法の壁ならん、山里の春の夕暮来て見れば(曾根崎) 「初瀬は大和國の名所。難波寺は大阪の四天王寺をいふ。この文はヤアお初より同語の「初瀬」を出し、以て詠曲の文を引き來り、「夕暮来て見ればに徳兵衛來て見ればをきかたのである。三井寺に「初瀬も遠し難波寺、名所多き鐘の音、盡きぬや法の壁ならん、山寺の春の夕暮来て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける。

花のふぶきと詠じけん志賀の山路(嬬) 三井寺に「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪と詠じけん志賀の山越うち過ぎて」。古歌に「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山越」。山家集上に「春風の花の吹雪に埋れて、ゆきもやらぬ志賀の山道」。

まづ初夜の 初夜の鐘を撞く時は諸行無常に惜しやと惜しやと響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生滅法な事と響くなり、晨朝の響きは生滅滅多に入用知れず、寂滅いらざる鐘の聲、一文呑みの百八煩惱、この鐘の音を聞く人は現世に於ては分限の金持(博多) まづ初夜の太鼓を打つ時は諸客盛んと響くなり、後夜の太鼓を打つ時は偈上滅法とそやして、曉方の酔醒めの分別に御思案も寂滅いらすと打立て、懈怠もなしの金遣ひ百八紋目

の眠覺し(扇八景) 三井寺に「まづ初夜の鐘を撞く時は諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生滅法と響くなり、晨朝の響きは生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響きて菩提の道の鐘の聲、月も散添ひて百八煩惱の眼の驚く夢の世の、迷もはや盡きたりや」とあるをもちつたのである。諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂は、涅槃經に出てゐる四句偈であつて、佛教の大道を簡述せるものである。梵鐘の響にこの意があるといふ。「初夜」「後夜」「偈上滅法」「寂滅入らず」はその各條を見よ。

雪ならて涙に袖を拂へとや、志賀の山越え末遠き(三國志) 古歌に「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山越」とある歌によつてかくいふたのである。「花のふぶきと詠じけん云云」を見よ。

【紅葉狩】

*かんやうきゆう 成陽宮の烟の中に、顔も手足も紅の、房は目ばかりじろじろと(重井筒) 「成陽宮」秦始皇帝が住んだ宮殿である。楚の項羽の兵變にかかつて三月月間も焼けたといふ。心中重井筒のこのあたりの着想は紅葉狩に據つたのである。紅葉狩に「或は殿に火烙を放し、または虚空に炎を降らし、成陽宮の煙の中に、七尺の隊圍の上になほありて、其たけ一丈の鬼神の云云」。抱符劍本地(巢林子

作)に「成陽宮の煙の中に、不思議や今までありつる女云」とあるも、紅葉狩によつたものである。 虎溪を出てし賢人 げになう虎溪を出てし賢人も、情は捨てぬ盃をいかで見捨て給はんと(抱符)

虎溪は支那廬山の麓にある。大明一統志・卷五十二に、「九江府虎溪、在府城南、晋僧惠遠送客過此、虎嘯號喝、因名、道書以三虎溪山爲三十二福地之一笑」。晋の高僧惠遠が白蓮社を結んで廬山に住むこと三十餘年、この山麓に橋がある、常に安居樂足とてこの橋より外へ出でなかつたが、或時陶淵明、諱修齡の二人廬山の麓に來る、惠遠書を以て二人か招きしに、陶淵明これに答へて、當山は樂酒である、飲酒を好む、酒を飲むことを許し給はば行きまますと言ひしかば、惠遠乃ち飲酒を許し、扱この二人の歸るを遂つて互に物語しなから興に乗じて覺えず虎溪を出たといふ故事であつて、このこと廬山記及び壽陽記に出てゐる。紅葉狩に「げにや虎溪を出でし古も、志をば捨て難き、人の情の盡の、深き契のためしとかや」。

堪へず紅葉青苔の地(抱符) 紅葉青苔のうらはしい地は踏むに堪へない。紅葉狩に「堪へず紅葉青苔の地」。白氏文集、卷十三、秋雨中隱元九詩に、「不堪紅葉青苔地、又是新園暮雨寒矣」。花を踏んで云云」をも見よ。

角はくはばく眼は明鏡、面を向くべきやうもなし(以呂波物語) 「くはばく」は枯木である。寛文八年刊の枯

集といふ本がある、その序文中に枯朽集に「かつくいしう」と傍訓してある。紅葉狩に「角はかばく眼は日月、面を向くべきやうぞなき。」

處は山路の菊の酒何かは苦しかるべき(五人兄弟)

紅葉狩にある文である。地名部「がくしやま」を見よ。

*むみやう

法界無縁の勸進所無明能化の門前に、念佛を便り辿り寄る(香庚甲) 障子に移る背責の相、無明の業火黒煙りふすぼり渡つて其身を焼く(女夫池) 無明の酒の酔さませ(生玉) あらあさましや我ながら無明の酒の酔心、うつつとなき變化の形(槍狩) 門の戸さつと押開き伴ふ母は生死の境、苦提門を引かへて、こればうき世の無明門(國性爺)

無明煩悩に迷うて眞理・理法を如實に知ること能はざるをいふ。大藏法數に「過去世煩悩之惑覆於本性、無所了明了故曰無明」。

「無明能化」とは、煩悩の暗に迷ふ愚昧の者を能く教化する義。

「無明の業火」とは、無明による業火の義、煩悩に迷うて惡業を作り、その罪業に於て自身を苦しめることを火に燒かれるに喩へていふ。

「無明の酒」とは、無明を毒酒に酔うて失心するに喩へていふたのである。妙法蓮華經・第七卷に「勿飲無明酒」。

槍狩(本郷のこの

文は、紅葉狩に「あらあさましや我ながら無明の酒の酔心、まどろむひまもなきうち」とあるを作かへたのである。

「無明門」とは、婆娑に路入る意にいらうたのである。

よし誰にもせよ上臈の、深山隠れの紅葉狩、かたがた推参叶ふまじと(槍狩)

紅葉狩に「よし誰にてもあれ上臈の、道のほとりの紅葉狩、ことさら酒宴のなかばならば、かたがた垂打叶ふまじ」と、なほこの前後の文も紅葉狩に據つたのである。

【盛久】

昔在靈山の御名は法華一乘、我等が爲の觀世音三世の利益(盛久)

昔釋尊は天竺の無雙山に於て法華一乘(法華經は一佛乘教を説きたるに經なるが故に云ふ)を説示されたが、今この婆娑に觀世音と示現され、過去現在未來の三世にわたつて衆生を濟度し給ふ同一同體の佛であるとの意。

靈山盛久に、「昔在靈山の御名は法華一佛、今西方の主、また婆娑示現し給ひて我等が爲の觀世音、三世の利益同じくは刑城に近き身」。

主馬の判官盛久は去年北山の茸狩に一曲一奏は出来たれども(城)

盛久に、「二年小松殿北山にて茸狩の遊路の御酒宴に於て、主馬の盛久一曲一奏の事聞えども隠れなし」。

【楊貴妃】

漢王二星の契を學び、天にあらは願はくは比翼の鳥とならん、地にあらは願はくは連理の枝とならばと、誓ひしさまごと(西王母)

「二星」は牽牛星と織女星をさす。唐の玄宗皇帝が寵姫楊貴妃と、七月七日牽牛星と織女星と相逢ふの夕、さまよき誓つて言ふに、若し天に上らば二人同體の比翼鳥とならう、若し地にあらば枝を連ねる樹とならうと。楊貴妃に「その初秋の七日の夜、二星に誓ひし言の葉にも、天に在らば願はくは比翼の鳥とならん、地に在らば願はくは連理の枝とならん」と、誓ひし書を密に傳へよや、私語なれども今洩れ初むる涙かな。白居易の長恨歌に、「臨別殷勤重寄詞、詞中有誓兩心知、七月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝、天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期」。

きうくわちやう 太真殿の九華帳、玉妃押退け出でたるもかくやら(西王母) 何とて妾まで來れるぞと、九華の帳を押退けて(弘徽殿)

「九華花の紋様を纏うた垂帘を九つ重ねた帳。この文に「玉妃」とあるは楊貴妃をいふ。楊貴妃に「唐の天子の勅の使、方士是まで参りたり、玉妃は内になましますか、何唐帝の使とは、何しに爰に來れるぞと、九華の帳を押退けて、玉の簾をかかげつつ立ち出で給ふ御姿云云」。

過去遠遠の昔を思へば、いつそ衆生の始めと知らず、未來永永の流轉更に生死の終りもなし、天上の五衰より北洲の千年も皆まぼろし戯れと(弘徽殿)

「天上の五衰」北洲の千年はその條を見よ。楊貴妃に「それ過去遠遠の昔を思へば、いつそ衆生の始めと知らず、未來永永の流轉更に生死の終りもなし、然るに二十五有の内何れか生者必滅の理に洩れん、先天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北洲の千年つひに朽ちぬ」。

たいえき 楊貴妃が行水姿、太液の芙蓉に勝りしと(雙生楊田川) たいえきの芙蓉のくれなる(西王母)

「太液」唐の玄宗皇帝の時に禁裡にあつた池の名。楊貴妃に「太液の芙蓉の紅、未央の柳の緑もこれにはいかで優るべき。白氏文集・長恨歌に「太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉」とありて楊貴妃の美を形容したのである。」「變化」枝春の雨を帯びしを見よ。

唐の帝は楊貴妃の別れを慕ひ、方士といつし道士に仰せて楊貴妃の魂の在所を尋ねられしに(弘徽殿)

「唐の帝」は唐の玄宗皇帝を云うたのである。ここに書いてあることは楊貴妃の中にも見えたる。

へきらく 上は碧落下黄泉の底までも女御の魂のありかを尋ね(弘徽殿)

秦の始皇は不老不死の薬を得んと、上は碧落下は黄泉を探せども

求めず(孕齋)

「碧落」天空をいふ。黃庭堅の詩に、「心似蛛絲遊碧落」。弘徽殿鸚鵡産家のこの文は、揚貴妃に、「上皇落す黃泉まで尋ね申せども云云」とあるを、作かへたのである。

ほくしろのせんねん

先天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北州の千年終に朽ちぬ(西王母) 北州の千年も皆まぼろしのたはむれ(弘徽殿鸚鵡産家)

北州の千年(須彌山の北)

西域記に、「云北州麗州、舊曰蘇丹越、於三四洲中、有情所貨皆最勝、故亦云高上、出餘三方、故形如三方座、四面羣等、長三十二肘、壽滿二千年矣」。日本西王母のこの文は、揚貴妃に、「先天上の五衰より須彌の四州のさまざまに、北州の千年つひに朽ちぬ」とあるに據つたのである。弘徽殿鸚鵡産家のこの文につきては、「過去をんをんの昔を思へば云云」を見よ。

蓬が島つ鳥

君にはこの世逢見んこともよもぎが鳥か(れば西王母) さるにても君にはこの世逢見んこともよもぎが鳥つ鳥、うき世なれども戀しや昔はかなや別れの、とこ世はこぞと伏轉びぞ入り給ふ(弘徽殿) 蓬が島は蓬萊島をいふ。鳥つ鳥とは鶴をいふ、絶島に棲める鳥なればしういふ。この二つをひびつづけて、蓬見んこともよもぎあらじ

にひかけたのである。揚貴妃に、「さるにても君にはこの世逢見んことも蓬が島つ鳥、浮世なれども戀しや昔はかなや別れの、とこ世の靈に伏沈みてぞ留まりける」とあるに據つたのである。

梨花一枝春の雨を帯ぶ

雲の鬢つら花の顔、寂寞たる兩眼に涙を浮べて見えたるは、梨花一枝春の雨を帯び、太液の芙蓉の紅、未央の柳たなやかに、ただしなしたとたたずめば(西王母)

美女の顔に憂愁の涙を帯びて寂しげな姿は、

啜へば一枝の梨花の春の雨を帯びたやうであるの意。日本西王母のこの文は揚貴妃に、「雲の鬢つら花の顔はせ、寂寞たる御眼の内に涙を浮べさせ給へば、梨花一枝雨を帯びたる粧ひの、太液の芙蓉の紅、未央の柳の緑もこれにはいかで盛るべき」とあるに據つたのである。白居易の長恨歌に、「雲鬢花顏金步搖、……太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉、……玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶雨、含情凝睇謝君王」。弘徽殿鸚鵡産家のこの文につきては、「和國の天子の勅の使云云」を見よ。

和國の天子の勅の使

和國の天子の勅の使清明これまで参りたり、女御は内にましますか、何我帝の御使とて何とて爰まで來れるぞと、九華の帳を押のけて玉の簾をかかけつつ立出で給ふ御姿、雲の鬢つらあたらしもの切つて捨てたる柳髪、昔の花の色はなけれども匂磗りし御顔はせ、寂寞た

る目の内に涙をうかめ給ひしは何に喩へん 梨花一枝春の雨を帯び、風にしたがつ海棠の(弘徽殿)

揚貴妃に、唐の天子の勅の使方士

りたり、玉妃は内にましますか、何唐帝の使とは何しに爰に來れるぞと、九華の帳を押のけて玉の簾をかかけつつ立出で給ふ御姿、雲の鬢つら花の顔はせ、寂寞たる御眼の内に涙をうかさせ給へば、梨花一枝雨を帯びたる粧ひの、太液の芙蓉の紅」とあるに據つたのである。

行く水の流れは絶えずして、しかも

元の水にはあらず(大原問答) 養老に、「行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にはあらず。鴨長明撰方丈記に、「行く川の流れは絶えずして元の水にあらず」。

【八、島】

いちるん 銚踏張り鞍笠につつ立ち上り、一院の御使源氏の大将檢非違使五位の尉(門出八島) 「院後白河上皇をさしたたのである。八島に、「銚踏張り鞍笠につつ立ちあがり、一院の御使源氏の大将檢非違使五位の尉」 海山一同に震動して、船よりは鬨の聲、陸には波の楯、月に白むは劍の光、汐に映るは兜の星の影、水

や空を行くもまた雲の波の、打合ひ刺違ふる船軍のかけひき、浮きつ沈むとせし程に、立つ春の今年も明けて、敵や寄せ来る又この浦に、鬨の聲を誘ひしは、浦風なりけり高松の、讃岐の屋島に立籠る(加増曾我)

八島に「海山一同に震動して、船よりは鬨の聲、陸には波の楯、月に白むは劍の光、汐に映るは兜の星の影、水や空を行くもまた雲の波の、打合ひ刺違ふる船軍のかけひき、浮き沈むとせし程に、春の波の浪より明けて、敵と見えしは群れある鴨、鬨の聲と聞えしは、浦風なりけり高松の、浦風なりけり」。

くらかき 銚踏張り鞍笠につつ立ちあがり(津戸三郎) 「鞍笠鞍坪に同じ。「くらつぽ」を見よ。八島に、「銚踏張り鞍笠につつ立ちあがり」。

今日の修羅の敵は誰ぞ、おお能登守教經よ、あらものものし手並は知りぬ(門出八島) 今日修羅の敵は誰ぞ、おお能登守教經よ、あら物物し手並は知りぬ、その一念の恨みの矢先、思ひぞ出づる壇の浦の、其船軍今もまた、閻浮にかへる生死の、海山一同に震動し(津戸三郎) 「物物しは物體らしいの義も相手も物らしくありし、その價値を認める義であつたが轉じて、たいさうらしい、そごがまいの意にいふ。「閻浮にかへる生死」は、婆娑生死

の意にいふ。「閻浮にかへる生死」は、婆娑生死

の境にかへること。謡曲「八島(喜多流)」に「今日の修羅の敵は誰ぞ、なに能登の守教經とや、あらものもし手並は知りぬ、思ひぞ出づる鹽の浦の、其船軍今はや、闊浮にかへる生(死)の、海山一同に震動して」。

そも修羅の敵は誰ぞ、大森彦七盛長とや、妻の敵いざ討たん、持ちたる柳を剣と定め、腹巻の焔は焦るる紅葉(女備)

八島に「今日の修羅の敵は誰ぞ、なに能登守教經とや」富士太鼓に「持ちたる撥をば御と定め、腹巻の焔は太鼓の烽火の」。

智者は惑はず勇者は懼れず(聖徳太子(宵庚申))

智者は理に明なるが故に能く理非曲直を辨じて心を惑はさない、勇者は道義を立てて守る所あるが故に事に臨んで懼れぬ。論語子罕篇に「子曰、知者不惑、仁者不憂、勇者不懼」。

八島に「智者は惑はず勇者は懼れず。船よりは関の聲、……浦風なりけり高松に、高松に木隠れて見えずなりにけり(女夫池)」

八島にある文である。但し末の文は、浦風なりけり高松の、あき風とぞなりにける」となつてゐる。

水や空、空行くもまた雲の波の、波の鼓の海静樂(天鼓)

八島に「水やそら、空行くもまた雲の波のちあひ」。

紫末濃の御着長(津戸三郎)

赤地の錦の直垂、

【紫末濃】紫染にて下を色濃くし、上方に向つて次第に色薄くし、遂に白くせるもの。津戸三郎のこの文は、八島に「赤地の錦の直垂に紫末濃の御着長とあるに據つたのである。落花枝に歸らず(關八州)」

八島に「落花枝に歸らず、破鏡ふたたび照さず」。傳燈錄に「落花舞上枝、破鏡三重照」。

【山 姥】

一洞空しき谷の聲、山高うして海近く、谷深うして水遠し、前には海水瀟瀟として、月真如の光を挑げ、後には嶺松巍巍として、風常樂の夢を破る、刑鞭蒲朽ちて蟻空しく去る、諫鼓苔深うして鳥聲かす(編山姥)

「一洞空しき谷の聲」とは、一洞空虚の中に谷音の反響するをさういふ。「瀟瀟」は海を打破るた波の。「真如の光」は吾人迷妄の闇を打破する真諦光。「常樂の夢」とは、世間總て空なるを有と思つて常に樂しいと迷へる心。「刑鞭朽ちて云々」はその條を見よ。山姥に「一洞空しき谷の聲、梢に響く山彦の、無聲音を聞くたよりになく、聲に響かぬ谷がたと、望みしもげにかりやら、ことに我住む山家の氣色、山高うして海近く、谷深うして水遠し、前には海水瀟瀟として、月真如の光をかかげ、後には嶺松巍巍として、風常樂の夢を破る、刑鞭蒲朽ちて蟻むなく去る、諫鼓苔深うして、鳥聲かすともさういふべし」。

暇申して歸る山の……山また山に山廻りして、行方も知らずなりにけり(編山姥)

山姥に「暇申して歸る山の、春は梢に咲くかと待ちし花を尋ねて山めぐり、秋はさやけき影を尋ねて、月見る方にと山めぐり、冬はさえ行く時雨の響の、雪をさそひて山めぐり、めぐりめぐりて輪廻を離れぬ妄執の響の、塵積つて山姥と、谷に響き今までここに、あるやと見えしが山また山に山めぐり、山また山に山めぐりして、行方も知らずなりにけり」。

きぬた 世を空蟬の唐衣、千聲萬聲の礎に聲のしつていしつてい、しつていからころ槌の音(編山姥)

「きぬた(衣板)の略。槌聲の上に衣を載せて槌で搦つこと。倭名抄に、「礎、亦作砧、岐沼伊太、今俗呼岐奴多、搦衣石也」。このあたりの文は山姥によつたものである、併せて見よ」。

*じやしやういちによ 邪正一如と観る時ば鬼にもあらず人にもあらず(編山姥)

「邪正一如理に順する正行も、理に違ふ邪行も、何れも理體より見れば眞如の體を離れず、何れも即ち一である。大藏法教に「如来所説一切煩惱妄執邪行之法、雖是邪妄不離眞如之體」と見えてゐる。山姥に「假に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて目前に來れども、邪正一如と観る時は色則是空そのままだ」。

*伐木たうたうとして山更に幽なり 先に立つて行く程に、伐木たうたうとして山更に幽なる、鳥の鳴く音も嵐吹く(嵯峨天皇)

「丁丁」は木を伐る音である。山姥に「おぼつかなくも呼子鳥の、聲すぢ折折に、伐木丁丁として山更に幽なり」。杜子美の詩に、「春山無伴獨相求、伐木丁丁山更幽」。

花を尋ねて山廻り、前期の寒風又ここに、え返りたる雲氣の雲を誘ひて山廻り、めぐりめぐりて輪廻の恨み思ひ知れやと、入道親子を引立て引立て、……雲を散して失せてけり(雪女)

山姥に「花を尋ねて山廻り、……冬は返え行く時雨の響の雪を誘ひて山廻り、めぐりめぐりて輪廻を離れぬ妄執の響の、……行方も知らずなりにけり」。

春は梢に咲くかと待ちし花の梢をえいやつとねぢ折つて山廻り、秋は清瀧敵を捜して首してやると山廻り、夫婦が眼に遮る奴ばら小鬘をちよつとつて山廻り、めぐりめぐりて輪廻を離れぬまうぜいの、雜兵切拂つた山姥が悴(弘徽殿)

山姥に「春は梢に咲くかと待ちし花を尋ねて山めぐり、秋はさやけき影を尋ねて月見る方にと山めぐり、冬はさえ行く時雨の響の雪をさそひて山めぐり、廻り廻りて輪廻を離れぬ妄執の、雲の塵つもつて山姥となれる」とあ

るを「作かへたのである。「まうぜいはいは妄執を猛勢にもぎつたのである。「難題」はその條を見よ。

春は三吉野・初瀬山・高間の山の白妙に、擬ふ霞もそれかとて花を尋ねて山廻り、秋はさやけき空の色かはらぬ影も更科や、姥捨山の名に愛でて月見る方にと山廻り、冬はさえ行く比良が嶽・越の白山、時雨行く雲を起して雲に乗り雲を誘ひて山廻り、廻り廻りて我君に(嶺山姥)

山姥に「春は梢に咲くかと待ちし花を尋ねて山めぐり、秋はさやけき影を尋ねて月見る方にと山めぐり、冬はさえ行く時雨の雲を起して山めぐり、めぐりめぐりて輪廻を」とあるを「作かへたのである。

萬箇目前の境界、懸河渺渺として巖峨峨たり、山復山何れの工か青巖の形を削りなせる、水復水誰が家にか碧潭の色を染出せし(振袖始)

萬事目前の有様、瀧水ひろひろと落ち巖石高く響え、山岳重疊して青苔のむした巖の削つたやうなのは如何なる名匠の作であらう。幾多の水溜溜溜として青き潭の色は如何なる名家の染出したものであらうの意、この文は山姥に出てゐる。和漢朗詠集に「山復山、何工削成青巖之形、水復水、誰家染出碧潭之色」*ほんなう 煩惱・菩提となるぞ頼もし(重井簡) 煩惱あれば菩提あり、

佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もなかは無からざるべき(嶺山姥) 責められ責むる煩惱の犬も泣く泣く引かれ行く(千足犬) 煩惱の夢をさますや法の聲も靜に、まづ初夜を鐘を撞く時は諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生滅法と響くなり、晨朝の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響きて、菩提の道も暗からず(嶺九)

「煩惱」一切衆生を迷はし惱ますもの、即ち无明貪欲の惑をいふ。心中重井簡のこの文は、摩訶止観に「煩惱即菩提」とあるに據つたのである。

嶺山姥のこの文は、謡曲「山姥」に「煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり」とあるに據つたのである。

「煩惱の犬」とは親心の離れ難き犬。實物集に「煩惱は家の犬打つども去らず」謡曲「通小町」に「さらば煩惱の犬となつて打たる」とも離れぬ。嶺九のこの文は謡曲「三井寺」にある文である。但し末句は三井寺には「菩提の道の鐘の聲」とある。見えてゐる。「しよきやうむつじやう」「ごやのかね」「せしやうめつぽふ」「じんでら」「しやうめつめつ」「ちりあひひ」「じやくつらら」「ほだはは各條に就いて見よ。

山姥は山路にて薪木を樵らせ給ひける(隅田川)

「山姥」は其條を見よ。山姥に「衆生あれば山姥もあり、……投入間に遊ぶことある時は、山姥の樵路に通ふ花の陰、やすむ重荷に肩を

借し、月もろとも山を出で里まで送るをりもあり。

山また山に山めぐり まけるばまばる(山姥) 君を慕ひて八幡山、山また山に山廻り、實に山姥が子孫ぞと(文武五人男)

山姥に「今までここにゐると見えしが、山また山に山めぐりして行方も知らずなりにけり」とあるを應用したのである。

世をうづぜみの唐衣(嶺山姥) 世を憂を空羅にひひかけ、空羅の羅を唐衣にひひかけたのである。「唐衣」はその條を見よ。山姥に「世を空羅の唐衣、拂はぬ袖におく霜は夜寒むの月に埋れ、打すさむ人の経間にも千聲萬聲の砧の聲のしでうつは」。

【熊野】

あら心なの村雨やな、春雨の降るは涙か……櫻花、散るを惜まぬ人やある(本領曾我)

この文は熊野に出てゐる。古今集、春歌下部に「春雨のふるは涙か櫻花、散るを惜まぬ人しなれば」。

思内にあれば色外に顯はる(冥途飛脚) 心に思ふことあれば、物思ひの有様が顔色に現はれる。熊野及び松風に「げにや思内にあれば色ほかにあらはる」心中天綱島上之巻に「色外に顯はる」とあるも、この謔に據つた。

閑雲鐘を隔つ 九つの鐘を何として

か聞洩せる、閑雲鐘を隔つといふ事を忘れし(會橋山)

閑雲に遮られれば鐘の音の至ること遅く且微かになつて聞えにくいとの意、熊野に「花は流水に隨つて香の來ること疾し、鐘は閑雲を隔てて聲の至ること遅し」。

草木の雨露の恵みに長ずる如く(國性論) 熊野に「草木は雨露の恵み、養ひ得ては花の父母たりし。和漢朗詠集、紀長谷雄の詩句に「養得自爲花父母、洗來難辨養君臣」。

しままのかちぢ しままのかちぢ清水の、堂もゆるげと踏す(兼好) 播磨國備前郡からかちん(嶋)と云ふ染物を産出するにつれて、節磨の濁を徒歩路ともぢつたのである。

四條五條の橋の上、老若男女聲聲に(孕常盤) この文は熊野に「しままのかちぢ清水の」とあるを應用したので「しままのかちぢ」は清水にかけていうたまでである。

ただこの儘にお暇と、ゆづつけの鶏が鳴く、東路さしてゆく道の、やがてやすらふ逢坂の、關の戸さしも心して、明けゆく跡の山見え、國を見捨つる雁がねの、それは越路我はまた、東に歸る嬉しさよ(本領曾我)

熊野に「四條五條の橋の上、老若男女聲聲都野に」。

熊野にある文である。但し「東に歸る麴じま」とは、熊野には「東に歸る名残かな」となつてゐる。

鳥が啼く ゆふつけの鳥が啼くあづま路さして飛ぶ鳥の(鳥帽子折)香妻にかかる枕詞である。鶴は夜の明時に啼く故に、「あけの」あけり「あづまにひひかけた」である。熊野に「細いとまよ、ゆふつけの鳥が啼くあづま路さして行く道」。

花を見捨つる雁がねのそれは越路、われもまた戀路に埋む(今川了俊)雁は春留立つ頃去るものなれば、花を見捨つる雁がね、というたのである。「雁がね」は雁が昔の義、轉じて雁のことになりふ。ここの文は熊野に、「花を見捨つる雁がねのそれは越路、われもまた東に歸る」とあるを、作かへたのである。

末世一代教主の如來 老少不定の境會者定離の掟、末世一代教主の如來も免かれ難しと思召せ(卯月潤色)末世に出て現世一代を教化する如來の義、釋迦如來をいふ。熊野に「末世一代教主の如來も生死の掟をば遁れ給はず」。

南を遙に眺むれば、稻荷の山の薄紅葉、青かりしよりとよみ給ふ(感)熊野に「南を遙に眺むれば、……、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋又、花の香は清水の、古今葉聞集の歌に、「時雨する稻荷の山の紅葉ばは、青かりしより思ひそめてき」。

山青く山白くして雲來去す 山青く山白くして雲來去す、人榮え人衰

ふ(本領曾我) 山青く山白くして雲來去す、人榮し人愁ふ、世上の變化力なく(三國志)

目別變化の境界感想を述べたのである。熊野に「山青く山白くして雲來去す、人榮し人愁ふ、これ皆世上の有様なり」百勝抄録詩に「山青山白雲來去、人榮人愁無有無矣」。

夢の問惜しき春なれや、咲く頃花を尋ねん、花前に蝶舞ふ紛紛たる雲、柳上に鶯飛ぶ片片たる金、花は流水にしたがつて香の來ること速し、鐘は閉雲を隔てて聲もたよりも遠江(本領曾我)

熊野にある文である。但し「聲もたよりも云々」は「聲の至ること速し」となつてゐる。昔は年中の好時節なれば夢の間惜しく、花咲く頃は花見に出でよう、花の前に蝶の戯れるは恰も雲の紛紛と舞へるが如く、柳上に鶯が枝から枝へと飛交ふ様は金のひらりと飛ぶに似てゐる。花は流水にしたがつて香氣を送り來ること速く、鐘聲は閉に浮る雲に隔てられて其聲の至ること遅くして雙方に聞えるを遠江にひかけたのである。

ゆやのま、こは古熊野の前、母のいたはり身にかへて、花を見つづる雁がねの(今川了俊)

「熊野前」平宗盛の妾である。熊野に、遠江國池田宿に熊野の母の病めるを聞き、宗盛に暇を請へども許されないので花見に伴ひ、落花の歌より宗盛も無常を感じて、熊野を東へ歸らしめたことを作つてある。ここの文に「花を

見つづる雁がね云々」とあるは詠曲、熊野に據つたのである。「花を見つづる云々」を見よ。

【頼 政】 頼政に「名にも似ず、月こそ出づれ朝日山」姫君下知して宣はく、柳渦巻く木蔭には風ありと知るべし、弱き枝には若をもたせ、強きに花を開かせよ、うつろふ枝を榎にかへて、互に力を合はずべし(國性爺)

頼政に「忠綱兵を下知していはいはく、水の逆巻く所をば岩ありと知るべし、弱き馬をば下手に立てて、強きに水を防がせよ、流れん武者には弓頭を取らせ、互に力を合はずべし」とあるを作り替へたのである。

【弱法師】 佛日西天に隠れて異體東北にかがやく、獅子吼の金言あやまたず佛法流布は王道の盛んのはじめと成りにける(用明天皇)

「佛日西天に隠れば、釋尊涅槃に入られたのを日輪西天に没したるを見よ」たのである。獅子吼「王道」はその條をいふ。弱法師に「夫れ佛日西天の雲に隠れ、……」によつて上宮太子國家をあらため萬民を救へ、佛法流布の世となして普く恵みを弘め給ふ」。

【雷 電】 秋に後るる老葉は風なきに散り易く、愁を弔ふ涙は問はざる袖に先づ啼く落ちて流れて(天神記)

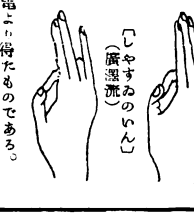
雷電に「秋におくるる老葉は風なきに散り易く、愁を弔ふ涙は問はざる袖に先づ啼く落ちて流れて」。

紫宸殿に僧正あれば弘徽殿に神鳴する、弘徽殿に移り給へば清涼殿に雷鳴る、清涼殿に移り給へば梨壺・梅壺・夜の御殿・晝の御座行違ひ行巡り(天神記)

雷電に「紫宸殿に僧正あれば弘徽殿に神鳴する、弘徽殿に移り給へば清涼殿に雷鳴る、清涼殿に移り給へば梨壺・梅壺・晝の御座行違ひ行巡り」。

「瀧水印」瀧水を標する印相であつて、水をもつて火を消す法である。「しやすみのいん」(三寶印流)

雷電に「僧正御覽じて騒ぐ氣色もまします」瀧水の印を結んで鏝字の明を唱へ給へば。なほ天神記のこのあたりの文は雷電に「待たものである」。



内裏も虚空に遊るかと(振袖袖)

雷電に「内裏は紅蓮の關の如く、山も崩れ内裏は虚空に遊るかと、震動ひまなく鳴神の朝拜殿に尊あればいんはた殿に悪鬼あり、いんはた殿に駈入り給へば新警殿に悪鬼あり、新警殿を追詰め給へば、殿上・日御座・夜の御殿を行道ひ追廻し(振袖袖)

雷電に「紫雲殿に僧正あれば弘徽殿に神鳴する、弘徽殿に移り給へば清涼殿に雷鳴る、清涼殿に移り給へば、梨壺・梅壺・晝の間・夜の御殿を行違ひ廻り合ひて」とあるを問かへたのである。「いんはた殿」はその條を見よ。

はんじのみやう 僧正騒がず灑水の印を結んでばん字の明を修し給へば(天神記)

「鑿字の明」鑿は梵字す(Vani)であつて、金剛界大日如来智海の種子であり、水大(地・火・風)の種子である。「明」は眞言と同じである。三種悉地軌に、「鑿字即大日如来智海、水大種子、神通自在法、名爲三智法身」。「鑿字の明」とは、唵縛曰雜歌都鑿(Om Vajra-dharu Vam)の眞言をさふ。雷電に「僧正御覽じて騒ぐ氣色もまします、灑水の印を結んで鑿字の明を稱へ給へば」は天神記のこのあたりの文は雷電に據つたものである。

【羅生門】

*つばものまじはり 盃取つては

天晴なつばもの交り、頼分あるなかの酒宴かな(堀田鼓鼓) 兵の交り今で名残の酒宴なる(関八州) 「つばもの」は、もと刀鋒の總名であつたのが轉じて武器を執る人、殿に出る兵士をいひ、更に強に勝想し「剛者、勇士をいふ。羅生門に「勇士の交り、頼みあるなかの酒宴かな。隔てぬ中の政事、頼もしや諸共に、近く居寄りて語るべし(弘徽殿)

【井筒】

女とも見えす男なりけり 本町や新物店の若衆は女とも見えす男なり

狂言に據れるもの

【相合袴】

橋がなければ渡りがな(雜體) 橋がなければ目的に達せられぬ。相合袴に手段が無くて渡りがなし。

【鞆猿】

門田の早苗よ、なぜなぜ、しよんぼ

けり(今宮) 女の如く美しい男子をいひ、在原業平の故事に據つたであつて、井筒にも「冠直衣は女とも見えす男なりけり業平の面影」と見えてゐる。今宮心中のこの文に「新物店」とある新物は、古着物に對する語で、新物店とは新しい衣服を仕立てて賣る店をいふ。(備考)

果林子が謡曲を脚色して取入れたものでは、堀山姥には安達原・山姥。大職冠には海士。酒吞童子枕雲葉には大江山。源氏十二段長生島臺には熊皮。孕常盤には鞍馬天狗。鰐丸には逆髮・鐵輪・芭蕉。平家女護島には俊寛。雙生岡田川には岡田川。出世景清には大佛供養泉清。用明天皇職人産には道成寺。最明寺殿百人上臈には鉢の木。松風村雨束帶鑑には松風。などはその主なるものである。

りしよぼりと植ゑたもの、今くる秋に刈るずよ(兼好) 鞆猿(鷺流)に「新田の構田の若苗を、ちやちやいしよんぼりしよんぼりと植ゑたもの、ちやいしよんぼり、今来る娘が刈らうよ。」

さるひき 罷出たる者は此邊の猿引でござる(松風) 「猿引」猿まはし。このあたりの文は鞆猿に據つたものである。

八幡大名 八幡大名鉢は箱に納め、弓袋に藏まるといふ(松風) 鞆猿のシテ(主人公)である。この文は狂言「鞆猿を賣いたのである。

【御田】

植ゑい植ゑいさ乙女、笠買うて取らせん、笠買うてたもるならば、なほも田を植ゑゆべし(兼好) 御田に「おちたて、田植ゑい見乙女、笠買うて着せうぞ、笠買うて給ふならば、なほも田を植ゑゆべし。」

植ゑい植ゑいさ乙女、めてたき君がお田植、苗代におり立つて田を植ゑは、笠買うて着せうぞ、笠買うてたもるならば、なほも田を植ゑるよ(女護島) 御田の文を所改作したものである。前條を見よ。なほ平家女護島のこのあたりの文は、狂言御田の調子に據つて作つたものである。

【笠のた】

かさのした 旅の空では親とも主とも大事にかける此菅笠、一夜預け申したし、是を座敷の真中にきつ

と直して下されと、笠差出せば淨瑠璃姫、出来た出来た、是は猿樂狂言の笠の下まなびか(源義経)「笠の下まなびか狂言は、旅僧或は處に立寄り、宿を借して下されと言へば主人、旅僧を宿するは禁制でありますとして斷る。借つてこの笠を預けます程に、座敷の奥中に置いて下され。主人、笠を預けるは差支ありませんと承諾した。旅僧、然らば御宿は笠に宿を借りましたとて、座敷の奥中に笠を被て讀經を始めた。かくて遂に宿を借り、主人から酒を勧められて舞を舞ひ、夜を明すことが作つてある。この文、笠の下といふ語に鈴木重家を宿させよとす語氣見えて、然も婉曲に語趣深い。

【小 舞】

曉の明星が、西へちろり東へちろり、ちろりちろりとする時は、扇おつ取り刀さいて、太刀の柄に手打掛けて、往なうと戻らうと、いうては袂に取附いた、往なうと戻らうと、いうては袂に取附いた、往なうと戻らうと、何ともそなたの御計らひと、いうては小腰にだきつた、いとしいはきりんなら、きりんなら、限りんならきりんなら」とあるに據つたのである。錦文流撰、傾城八花形に、曉の明星が、西へちろり東へち

ろり、ちろりちろりとする時に、扇おつ取り刀さいて、太刀の下緒に手うちかけて、行かうと急がうと、いうては小腰に抱附いた、いとしかきりりない、きりりんきりりんか、きりりんないても刀もない物を」と見え

【こんくわい】

こんくわい 眷族どもが敵一討打つて食うてのけう、我には晴るる胸の煙こんくわいの涙なるらん天威の吼喊狐の鳴聲。和訓菜に「こんくわい。狐の狂言にいへり、和語連珠に吼喊の文字を填めたり、狐の鳴聲をもて稱するなり。こんくわいに「我には晴るる胸の煙こんくわいの涙なるぞ悲しき。」

の神、大唐にては幽王の后と現じ、我朝にては稻積五社の大男神にておはします。*はんまぢどり 沖の鷗・磯千鳥、はんまぢどりがちりりやちりり、ちりり縮緬・紗綾や緞子の(吉岡宗)「はまぢどり」(宿千鳥)の音便によつて撥音「ん」の増加した語。對鳥祭に「はんまぢどりの友呼ぶ聲は、ちりりやちりり、ちりりちりりやちりり。」

【茶 壺】

佛堂の香も消え次第、ざざんざざんざざんざざん(薩摩歌) ちの出現世の仕舞は少し取る懸もある、貳百目あればざざんざざん(生玉) 二の宮の姉がくれたる小樽をも心で結ぶ蝶花形、母は持佛の前に寢て河津殿の位牌諸共にざざんざざん(會稽山) 聲聞かせてたも(會稽山) 酒宴の座でよく盛つた「三國一ぢや、瀟松の音はざざんざ、酒になりすまいたしやんしやん」といふ小唄の囃で、即ち浮れ騒ぐ意にいふ。茶壺に「ざざんざ、瀟松の音はざざんざ、ああいかう酔うたこかな。竹簾物語に、「またざざんざなど風所もあり。井原西鶴撰、好色一代男、越後寺泊りの條に、「この頭上方よりざざんざと申す小歌がはやり来り、二二二の若い衆いろいろ稽古いたせども、聲がそろはぬと申しはべる。」「三國一ぢや」をも見よ。

【對鳥祭】

*はんまぢどり 沖の鷗・磯千鳥、はんまぢどりがちりりやちりり、ちりり縮緬・紗綾や緞子の(吉岡宗)「はまぢどり」(宿千鳥)の音便によつて撥音「ん」の増加した語。對鳥祭に「はんまぢどりの友呼ぶ聲は、ちりりやちりり、ちりりちりりやちりり。」

【つんぼ座頭】

笠に挿いたは柳の葉、腰に挿いたも柳の葉(歌念佛) つんぼ座頭の小歌に「此處通る熊野道者の、手に持つたる柳の葉、笠に挿いたも柳の葉、これはどなたのお聖様ぞ、笠の内がおゆかし、大津坂本のお聖ぢや、ああ冠者聖ぢや。西瀨與志撰、野原友三味線寶永五年刊、卷二に、「こを通る熊野道者、手にもつたる柳の葉、笠に挿いたも柳の葉といふ歌を、今の目から見れば云々。柳は那木の合字で、源名竹柏といひ、松柏科の樹で高さ二三丈に達す、その葉は竹に似て厚い。熊野縁起に、「大神當國(紀伊)に垂跡の初め、先づ切目の玉名木の淵に現はれ給」とありて、即ち柳は切目王子の神木である。熊野比丘尼は柳の葉をも賣つたので、熊野比丘尼の書業に、「法性覺道行の文中、熊野比丘尼の書業に、「我我は熊野比丘尼、如何な關所も柳の葉、柳の葉は入りませぬか、ちとくわんくわんとぞ仰せける」と見えてある。嬉遊笑覽卷六上、昔曲の條に色駕馬の唄を擧げて、「爰を通る熊野道者、手に持つたる柳の葉、笠に挿いたも柳の

葉といふ歌云々」と見えてゐる。

【花子】

梁山のその奥山のこけ猿小猿が雨にそほ濡れて、ひひつくばうてかいつくばうて。凱陣八鳥

花子に「梁山の奥のこけ猿めが雨にしょぼ濡れて、つくばうたにさる似た。」こけざるの義に就いては語解部を見よ。

【枕物狂】

枕物にや狂ふらん(偶田川)

枕物狂の文に、「枕物にや狂ふらん、ぬるも寝られず起きもせず」とあるに據つたのである。

【その他の小歌】

磯邊の千鳥、ちんりちりちりと友鳴く聲との、鳥隆より櫓の音がかりころり(閑扇曾我)

狂言唄・宇治のまらしに、「嶋の洲崎に立つ浪つけて、はんま千鳥の友呼ぶ聲は、ちりちりやちりちり、ちりちりやちりちりと友呼ぶ聲に、嶋陰より櫓の音がかりころり、かりころりと漕ぎだいて。」

七つになる子がいたいけな事言うた、殿がほしと唄うた(賀古教信) これは狂言論の小歌に據つたもので、この小歌は日本歌謡類聚上巻にも「七つになる子」

といふで出てゐる。異林子作・閑八州藝馬には「七つになる子がいたいけな事言うて、殿がほしと詠うた」と見えてゐる。

森の下浮かれ鳥の告げ渡り(大藤冠) 狂言小唄に「こは山陰、森の下森の、月夜鳥はいつも啼く。」

伊勢物語に據れるもの

淺間の嶽に立つ煙 淺間の嶽に立つ煙、その一筋をさまざまに、霞にえいじ雲に見て、歌人は思ひをのぶるとかや(最明寺殿) 伊勢物語に「信濃なる淺間が嶽に立つ煙、をちこち人の見やはとがめぬ。謡曲・神の木に「信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖巻く。」

在原の中將なりしまめ男、かのこま だらと詠じけん富士(大磯虎) 「在原の中將」とは在原兼平のこと。「まめ男」「かのこま」は兼平のこと。「まめ男」は「まめ」に「おとこ」を添へて「まめおとこ」と見よ。

在原の優男 かの在原の優男、はるばるきぬるつまかばに(加増曾我) 在原兼平は美男であつたのでふ。この文は、兼平が三河國八橋で、「から衣きつづなれに」つましあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」と詠んだ歌の語句によつたのである。この歌は伊勢物語にも古今集にも見えてゐる。「妻川」は遊女の名。

吉野初瀬の花よりも紅葉よりも、戀しき母が見たいものぢや(三世相) これは狂言小歌に據つたもので、この小歌は日本歌謡類聚上巻にも「七つになる子」といふ題で出てゐる。

色に身代宇津の山、高安、齋宮、西の對、二條の後の條に、似たつきもなき戀の闇、さそひ出せし白玉を、どぞと問へば芥川、しばしは露の置き所、伊勢物語の模様もあり(蛙合殿) 伊勢物語にあることを模倣にした著物雛形を、伊勢物語中の語を引用して記したのである。色に身代をうち無くするといふに宇津の山をいひかけ、「宇津の山」「高安」「齋宮」「西の對」は皆伊勢物語に見え、「二條の后云々」も伊勢物語に、「二條のきさきに忍びて妻りけるを、世の聞えありければ、せうとたちの守らせ給ひけるとぞ、昔男ありけり、女のえ逢ふまじかりけるを、年を經てよはひわたりけるを、からうじて女の心をあはせて盗み出で、いと暗きに率てゆきけり、芥川といふ川をいきければ、草の上におきたりける露を、かれは何ぞとなむ男に問ひけるを、ゆくさきはいと遠く夜もふけにければ、云云、白玉かなに

ぞと人のひとしとき、露とたへてけなましものを」と見えてゐる。 鶯とならんと詠じけん古歌 「野とならば鶯とならん云云」を見よ。

*おほぬさの 大ぬさの引く手数多のこの蒲團、小六も寝つる、小夜も寝つらん、房も寝よう、引く手数多に何處の誰めと寝くさつた(重井簡) 「大幣の」大は美稱、「幣」は麻で作るが故に麻をぬさとも訓む、「の」は如くの意、大幣は被する時に用ゐる串にさした四手である。被果つれば各引寄せて撫でる物なれば、引く手数多とつづけていふのである。以て彼方此方の數多の人人から引張られて離くことはいふ。伊勢物語に「大幣の引く手あまたに聞ゆれば、思へどえこそ頼まざりけれ」と見え、古今集には第三句「なりぬれば」となつてゐる。

春日の里も近ければ若紫の色深く(井筒) 伊勢物語の歌に「春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れ限り知られず」。 風吹けば沖つ白浪たつた山、夜半にや若がひとりゆくらむ(井筒) 「立田山」は大和國守郡郡大和川の上流に沿うた瀨瀬である。この歌は兼平が河内國高安の里の女の許に通ひ、夜中に歸るのを女が氣遣うた歌で、風が吹けば沖に白浪が立つことであるが、その立つと云ふ名の立田山を、時もあるが、夜半に若が獨り行くことであらうか、さてきて御身の上が案ぜられること